

地域交流研究

年報第15号



都留文科大学地域交流研究センター

2018年度

表紙絵の説明

表紙画像は、都留文科大学地域交流研究センターによる地域貢献活動『都留市
幼保連携事業』でのスナップ写真です。この活動は図工・美術教室の学生スタッフ・
教員を中心に行われ、幼児の特徴や様子を踏まえ、「創造的に作ることの楽しさ」
や「新しい発見や驚き」が生まれる活動を目的に取り組まれています。

(青木 宏希)

地域交流研究

2018 年度
年報 第 15 号

目 次

—第 14 回地域交流研究フォーラム—

『大田堯先生からのメッセージ』—生きること、学ぶこと、そして未来へ—

『大田堯先生からのメッセージ』—生きること、学ぶこと、そして未来へ—	4
------------------------------------	---

—2018（平成 30 年度）年度活動報告—

I. 2018 年度の活動について〔概況〕	14
II. 各部門の活動	17
II-1. フィールド・ミュージアム部門	
II-2. 発達援助部門	
II-2-1. 地域情報教育	
II-2-2. 地域美術教育	
II-2-3. 地域インクルーシブ教育	
II-3. 暮らしと仕事部門	
III. インターフェイスとメディアの活動	35
III-1. 第 14 回地域交流研究フォーラム	
III-2. 各種講座の開催	
(1) 都留文科大学現職教員教育講座	
(2) 都留文科大学子ども公開講座	
III-3. 学部共通科目の開講	
(1) 「地域交流研究Ⅰ」—「地域」から見通せる範囲を拡げるために—	
(2) 「地域交流研究Ⅱ」—生きものの地図をつくる—	
(3) 「地域交流研究Ⅲ」—山梨に関する学習を通じて図書館に親しむ	
(4) 「地域交流研究Ⅳ」—地域を観察し記録する—	
IV. 地域貢献活動	41
IV-1. 山梨県南都留地域教育フォーラム	
IV-2. 都留市放課後子ども教室事業	
IV-3. 文大ボランティアひろば	
IV-4. 地域交流研究センターサテライト	
IV-5. 文大名画座	
IV-6. 学級づくりの向上をめざす実践講座	
V. 地域交流研究教育プロジェクト	54
V-1. 田んぼクラブ	
V-2. 食育つる推進プラン	
V-3. 谷二ラボ	
VI. C O C 推進機構	59

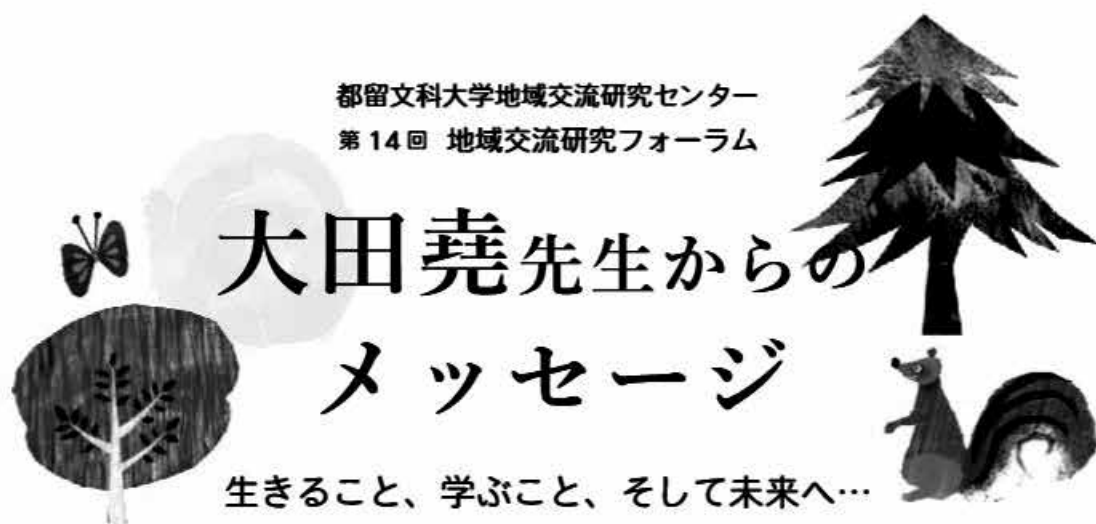
第14回地域交流研究フォーラム

『大田堯先生からのメッセージ』
—生きること、学ぶこと、そして未来へ—

2019年2月13日
都留文科大学

都留文科大学地域交流研究センター

第14回 地域交流研究フォーラム



大田堯先生からの メッセージ

生きること、学ぶこと、そして未来へ…

2019年2月13日(水) 18:00

都留文科大学2号館101教室 参加無料



ドキュメンタリー映画(2011年制作)

かすかな光へ

日本の社会と人間を見つめ、
教育のあり方を問い続けてこられた
大田堯先生(都留文科大学元学長)の
ドキュメンタリー映画『かすかな光へ』を上映

監督: 森康行 詩・朗読: 谷川俊太郎
音楽: 林光 ナレーション: 山根基世



〔お問合せ・お申込み〕

都留文科大学

地域交流研究センター(主催)

0554-43-4341 (内線 606)

* 本学のホームページからもお申し込みできます。

第14回 地域交流研究フォーラム

ドキュメンタリー映画 「かすかな光へ」 上映会・交流会

第14回となる今回の地域交流研究フォーラムは、昨年12月23日に逝去された大田堯先生（都留文科大学元学長）のドキュメンタリー映画『かすかな光へ』を追悼の意を込めて上映いたします。

大田先生は学長時代に「都留自然博物館」を構想されました。その思想は現在の地域交流研究センターの原点でもあり、今なおセンターの取り組みに生き続けています。

「生きること、学ぶこと、そして未来へ……」。大田先生のメッセージを通して、地域の教育や福祉、自然について、そして「地域交流研究センター」のこれからについてみなさまと一緒に考える機会にしたいと思います。多くのみなさまのご参加をお待ちしております。

場所：都留文科大学2号館101教室

日時：2019年2月13日（水）18時～20時

プログラム

開会の挨拶 竹下勝雄（地域交流研究センター長）

基調講演 18時10分～19時40分 映画『かすかな光へ』上映

感想交流会 19時45分～20時

閉会の挨拶 杉本光司（本学特任教授・元地域交流研究センター長）



1918年～2018年。教育研究者。東京大学名誉教授、都留文科大学名誉教授。日本子どもを守る会名誉会長。東京帝国大学文学部卒業。東京大学教育学部教授、日本子どもを守る会会長、都留文科大学学長、日本教育学会会長などを歴任。専攻は教育史、教育哲学。広島県出身。

【主な著作】

「かすかな光へと歩む」（一ツ橋書房）、「教育の探求」（東京大学出版会）、「教育とは何か」（岩波新書）、「地域の中で教育を問う」（新評論）、「子は天からの授かりもの」（太郎次郎社）、「生命のきずな」（偕成社）「子どもの権利条約を読み解く」（岩波書店）ほか多数。



『大田堯先生からのメッセージ』 —生きること、学ぶこと、そして未来へ—

北 垣

これから第14回地域交流研究フォーラムを開催します。

それでは上映に先立ちまして、本日の映画に関するご案内をいたします。今日はまず、基調講演として最初に大田堯先生のドキュメンタリー映画『かすかな光へ』を上映いたします。その後、みなさんと映画を見ての感想交流会を開催したいと思っております。

なお、交流会での発言につきましては、来年度発行する予定の地域交流研究年報の方に掲載させていただきますので、その点は予めご了承ください。それでは、上映に先立ちまして、竹下勝雄現センター長からみなさんにごあいさつを申し上げます。よろしくお願いします。

竹 下

みなさんこんばんは。地域交流研究センター長の竹下です。今日は本当にお忙しい中、しかもこのような時間帯に多数の方においでいただきまして、本当にありがとうございます。また、いつもセンターの活動に対して様々な角度からご協力いただきまして、この場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございます。本年度のフォーラムは、2011年に公開されましたドキュメンタリー映画『かすかな光へ』こちらを上映いたします。この映画は、昨年12月の23日にご逝去されました教育研究者で本学の元学長でいらっしゃいました大田堯先生が教育の本質を問い続けた活動をつづったものになっております。8年前に公開されてからですね、今もお全国各地で自主上映会が催されております。大田先生は、教育史・教育哲学をご専門とされ、日本教育学会長や東京大学教育学部長、それから本学学長を歴任されました。大田先生が本学学長時代、1977年から83年のその時代にですね、その実践の中から都留自然博物館という構想を描かれました。これは、人間と自然との共存の関係を考えた新しい社会の創造を目指そうといったものでした。本センターの活動の柱の一つにフィールド・ミュージアムというものがございまして、これは、大田先生の構想が原点となっております。地域とのかかわりの中でですね、地域のみなさまと共に地域を観察し、調べ、そして記録し、学び合う、そういった、私たちの取り組みの中の下地に、大田先生の考えや構想が根付いているのではないかなと感じております。このフォーラムでは、大田先生が残されたメッセージを通して、地域の教育や福祉、文化、自然について皆様と一緒に、この時間、考える機会にして、この『かすかな光へ』を基調講演会として、位置づけて上映することにいたしました。本編を通して、「違う、関わる、変わる」何かを感じていただけたら幸いです。なお、上映後、感想交流会を引き続き予定しております。また、本日お配りした冊子の方ですが、これは、これまでセンターが発行した地域交流センター通信に掲載されている大田先生の関連ページやそれから新聞記事をまとめたものですので、あわせてご覧ください。それから、このフォーラムに合わせてですね、となりの102教室の方で展示コーナーを特設し、先生が当時学生たちへの聞き取りに用いたカセットテープや貴重な研究資料を展示しておりますので、お帰りの際に、ぜひお立ち寄りください。お願いします。そ

れでは、これから上映会の方にさっそく移らせていただきます。

—「かすかな光へ」上映中—

北 垣

どうもありがとうございました。これで、1部の基調講演の方は終わりにしたいと思いますが、引き続きまして、準備をしたのち第2部に移りたいと思います。5分後に開始しますので、よろしくお願いいたします。

—5分休憩—

堤

第2部をはじめるにあたってですが、ここに残った皆さんは、感想交流してみたいな、と思って残られていると考えていいですか？そうしましたら、この部屋は、感想交流するにはあまり向いてない大きさの部屋なので、申し訳ありませんが、後方にいる人たちは前方部分に出て来てもらって、座ってもらってもいいですか？はじめに、5分程度、近くの人たちで感想を語り合う時間を取りたいと思いますので、できるだけ密集してもらえると嬉しいです。今日は、映画に触発されて湧き出てくるものを他者と共有してもらって帰ってもらいたいな、と思います。

—移動—

堤

はいでは、短い時間になってしまいますが、まずは近くの2～3人で感想を共有してください。始めてください。自己紹介からどうぞ。

—感想交流中—

堤

ここからは、全体で共有しながらやっていきたいと思います。口火を切ってくださる方がいたら、挙手をお願いします。誰か、いかがでしょうか。はい、どうぞ。名前からお願いします。

発言者①

都留文科大学の卒業生です。ここでお話をするなかで出たことなんですけれど、僕は小学校の現場で働いています。他の方も社会人として働いていると思うんですが、今している仕事って、生産性だったりとか成果というものが求められていて、今日の上映であったような、教育そのものを考えると、触れる環境というのが、学校現場でさえ、無くなってきているというのが今の子どもたちを取り巻く現状かなという、これは、重く受け止めて、何かしら手だてを考えていく必要があるな、というふうの一つ思いました。また、隣の席で座っている

M君が学生なんですけど、今回 ICT っていうことに注目して卒業論文を書いていたそうです。その ICT 化が発達して、もちろん、利益というかいいいこともあるんですけど、一方で、今日の映画にあった今泉先生の言葉のように自然と触れられなくなるというか、実物を見られなくなるということがあります。例えば、よそから連れてくるっていうことが、99%の魅力を失うという話があったように、その実物と触れられなくなるということは、つまりその1%の魅力のなかで、楽しんでいるというか、生きてるっていうことなんだろうな、という風に感じました。その1%の魅力ではなくて、この実物に触れるということを通して、本来ある魅力に、もっと気づける学校現場であつたりとか、地域ってというのが、作っていかなきやいけないのかな、と思いました。ということをお願いたくて、発言しました。ありがとうございます。(拍手)

堤

ありがとうございます。効率性の話であつたり実物とのふれあいであつたりというような話がありました。これについて、学校教育学科の鳥原先生いかがでしょうか？

鳥 原

今 ICT が普及した結果、実物に触れる機会がなくなってきたっていう、そういうご指摘なのだと思いますが、僕なんか考えるのは、むしろ、なんだろう、実物に触れる機会が少なくなったからこそ実物をね、ありがたがるのではなく、二面性というか背中合わせ、なんか理由がもっとあると思いました。

堤

今のテーマを続けてでもいいですし、別の切り口からでもいいですけど、いかがでしょうか。

発言者②

都留市の小学校で働いている者です。実物ということが、自分はすごく印象に残っています。最初の方の本郷という所での農民のサークルってところでしたけど、映像を見てても女性の人が多かったりとか、あと最後は障害のある方がということで、最初もキーワードになってましたけれども、荒い言葉ですけど、マイノリティというか、そういう方々と、ずっと対応されてたんだなということが、すごく印象的だったんです。そこで、実物ということだと思んですけども、最後のあたりで感性と言葉ということを対比して語っているところがありました。大田先生の実践されてきたことというのを、多様ということで考えてみたんですけども、その感性を開放するときに、言葉であつたり、アートであつたり、あるいは、自然とじかに関わるということを積み重ねたということで、開放するということを少しキーワードとして今日感じる事ができたのかな、というふうに思いました。すみません、バラバラですけど。以上です、ありがとうございます。(拍手)

堤

ありがとうございます。はい、どうぞ。

発言者③

国文学科の教員をしています、野中といいます。文大3年目で卒業生ではないので、大田堯先生のことを詳しく知る良い機会だと思って、今日は来ました。印象に残ってる場面がたくさんあるんですが、一つだけ挙げます。子どもたちがパンツ一丁で大騒ぎしている場面がありました。あそこから私は、「学ぶ」ということの原点がここにあるのだというメッセージを受け取りました。でも、あの子たちが育っていくと、いつの間にかああいうものが失われてしまうわけです。それって何なのかと考えると、今の私の問題意識から見ると、学校教育なんですね。たとえば、いまこの場にも学校教育的なルールが作動しているわけです。だから、手を挙げて質問をせずにいきなりパンツ一丁になって踊り出すようなことをしたら、たぶん怒られます。私は中学や高校で教員をしていましたけれど、たとえば、夏暑いときに水浴びなんかしたら確実に叱られるわけです。つまり、やりたいという気持ちや好きという気持ちを出すことをおさえていくことが当たり前になっていってしまう学校教育って、いったい何なのだろうというのが私の問題意識なんです。子どもたちがあんな風に生き生きと学べる時間を十分に創り出すことができない今の学校教育に対する問い直しのようなものを、強烈なメッセージとして今日は受け取りました。ありがとうございました。(拍手)

発言者④

大田先生が学長時代の都留文科大学の卒業生です。今東京で教員をしています。入学式の日、大田先生が、君たちは都留人間研究大学に入った、これから、都留の自然いっぱいの大学で、4年間しっかり学んで、地元に戻っていい教員になってくれ、と仰ってくださった言葉を、今、思い出しています。都留人間探求大学という言葉のなかに、先生がメッセージを込められた、一人一人が違うんだよということや、それから、子どもたちが変わっていく、変化していく力を信じて、教員は手助けしていくこと、というのを改めて今日聞いて、明日からまた教員として頑張っていこうかな、というふうに改めて思いました。今日は貴重な機会をありがとうございました。すみません、ひとこと言いたくて。ありがとうございました。(拍手)

堤

はい、そのつながりで、大田先生と交流したことがある方々いかがでしょうか？

発言者⑤

私も大田先生が学長をされた時の学生でした。以来ずっと大田先生とはもちろん離れてました。先生が学長時代、卒業の時に先生から賞状を頂きました。背中を、本当に社会に出て良いよ、っていうそういう背中を押して頂いたことで、本当に私は人生を歩んできたと思います。先生の今日の映画、私は初めてだったんですけども、先生が一生懸命道路をお掃きになっているところ、それがすごく印象に残っています。やっぱり自己と他者とのつながりというのがいますごく難しい時代です。私は、植物を通して嗅覚とかハーブを育てることで、あるいは、それで、五感ですね、嗅覚とか、あと触覚っていうのを大事にするということで、北垣先生のワークショップをやらせていただいたこともあります。やっぱりその、他者との距離の取り方というのが本当に分からない時代です。ですけども、大田先生は道路を掃くということ、要するにものとか自分でないもの、自己で無いものですね、他者とかものとか

そういうものを全く区別せずに、そのなかに入りこんでいって、言葉でないところで私たちに語りかけてくれているんだな、というのをすごく今日感じました。そしてその場面を見てすごく感動しました。いろいろ言いたいことはあるんですけども、私たちとつながっていたり、あるいは、五感をすごくまた呼びますということ、そういうことを改めて大事にまた人生を歩んでいきたいなと思いました。それと同時に、本当に他者と自分との、自己なのか他者なのかっていうそここのところの境界というのは、すごく、人間のテーマとして、私もまた心に刻んでやっていきたいなということを強く感じました。今日の機会ありがとうございます。(拍手)

発言者⑥

ここの元教員の笠原と申しますが、今、日中戦争史の研究を集中してやっております。

今日の映画は初めて見たのですが、大田先生と呼ばさせていただきますが、大田先生の教育者としての原点が戦争体験にあったということが分かりました。

大田先生は1942年に広島部隊に入隊し、南方最前線に送られ、アメリカの潜水艦のために乗船が撃沈され、36時間も南海に漂ったすえ、幸運にも救出されたのでした。しかし先生の故郷の広島では、原爆により十数万の命が失われ、多くの友人、知人の命が失われたのでした。大田先生が「いのち」の視点から教育を考えてきたのは、多くの仲間や友人・知人の命が失われたなかで、自分が生き残ったことの意味を生涯問いつづけてきたからでした。

今日の映画の最初の方で、大田先生が書庫で、戦前の生活綴り方教育運動の資料を見ている場面が出てきました。解説はありませんでしたが、戦前、「生徒の一人ひとりがかけがえない命」を持っているという教育思想にもとづいて、児童、生徒一人ひとりが自分の生活を見つめ、生きていることの大切さを作文に書いて発見させるという教育実践でした。今でいえば、児童、生徒がだれも基本的人権をもっていることに気付かせるためでした。

「天皇のために死ぬ」「国のために死ぬ」ことを愛国教育、軍国教育、皇国教育により強制した戦時体制の日本では、この生活綴り方教育運動は弾圧されてしまいました。

日本の戦争は、一人ひとりの生きる権利、すなわち基本的人権を容赦なく奪い、犠牲にしたのでした。日本の戦争は侵略戦争でしたから、侵略された国、被害国の兵士、国民の膨大な数の尊い命を容赦なく奪いました。また加害国の日本においても、膨大な数の兵士、国民の尊い命が犠牲にされました。戦争は最大規模の基本的人権の蹂躪、抹殺であるという、メッセージを今日、大田先生の映画を鑑賞させていただいて、改めて痛感させられました。

戦争とは、人間性を、まさに基本的人権を、被害国にたいしてはもちろん、日本のような加害国において破壊、抹殺する大量殺人行為であるといえます。自然の生命、人間の生命の大切さ、尊さを我々は尊重して、自然とともに生きていくことの大切さを今日の映画から学ぶことができました。私は歴史家としてできること、すなわち、戦争はどういうものであって、それがいかに基本的人権の破壊、抹殺であるか、だから再び戦争はやってはいけない、その思いを歴史書とおして知ってもらえるよう、頑張っていきたいと思います。今日の大田先生の映画から私は元気をいただきました。ありがとうございます。(拍手)

堤

ほかには、いかがでしょうか。大田先生と関わりのあった遠藤さん、いかがでしょうか？

発言者⑦

今日の映画を見ていて、大田先生に、ほんとにお会いできたような気持ちになりました。大田先生が学長先生の頃、学長さんなんて考えないで、お付き合いしてました。もうどこでも、先生の行かれるところには京都の与謝の海養護学校とか、中野の全国親の集いとかあらゆるところに連れていっていただいて、もうその感化をだいぶ受けたようですが、どうしようもない人間です。で、あのその当時は、先生が宿舎に泊まると、押しかけていきました。押しかけていって、そして話をして、交流会なんかをずいぶんお願いしましたが、この沿線で講演するときは無料でしてくださいました。私たちも、都留の時、やっぱり羽仁説子会長の、全国幼年教育研究協議会富士幼年教育研究会という支部をつくって、そして、その講演会へも来ていただきました。そのような関係で、先生とお話しできる機会はたくさんありました。その頃の先生たちは、ものすごく論議をしたり、情熱がものすごくありましたよね。それから考えて、今の社会状況のなかでの教育環境自体が、はたしてこういう論議をしているかどうか。たとえば学校で職員室で休み時間になると集まって、そこですぐそういう論議が始まるんですよね。ところが、退職して66歳まであとちょっとというときに、臨時で教育の現場にいきましたが、職員室の中には、ワープロが、ビルディングみたいに先生たちの前に並んでいるんですよね。職員室へ戻ってくると、そっちへ向いているんですよね。私は職員室も変わったなと思いましたよね。教育はね、危機的状況なんですよ。子どもの虐待なんかおこるけどね、現象だけ（虐待等の）とらえていたんでは解決しないと思うんです。親が育った家庭や親がどういう育ち方をしたか。今私が思うのにはね、親が親に育ってないと思うの。子どもの時から。子どもの育ち方が今日映画で見たような育ち方をしていないんですよね。もう家庭個々でバラバラで今日まで来てしまっている。そして今日、子どもが群れを成して遊ぶこともそんなこと今ではみられないですよ。だからもうこの映画見たらもう一回みんなで、とくに今日来ている人たちは、3人でも4人でもいいからこの映画をもとにね、話し合いをして欲しい。そうでなかったらね、子どもたちも社会もどうなってくかと思えますね。ちょっと余計なこと言すぎましたけど。今日、映画をみて感激を取り戻したけれども、86歳だからね、出る場所がないんですよね。でも、何かできることはしてみたいと思います。（拍手）

堤

はい。あとは、学生の声を聞きたいなと思うんですけど、いかがでしょうか。

発言者⑧

国文学科4年です。すごくおもしろく見ました。大田先生が、生物の特徴は違うこととおっしゃってました。違うことを、生物の生命の特徴、命の特徴を考えるのが基本的人権だ、と定義できるんじゃないかとおっしゃってました。金子みすゞが、「みんな違ってみんないい」って、「違うことが大切」って言ったんですけど、逆に、同じってことを大切にしたい詩人もいます。原田直友さんっていう人が、村の人口という詩で、猫とか犬とか人とか全部数え上げて、みんな命を授かっていることに変わらないので、みたいな詩を書いています。だから、違うことも考えないといけないうんですけども、同じってことも一緒に考えていかないといいかなと思いました。ただ大田先生は、教育が、ある意味全能で、従順な工事労

働者とかそういうのを作っていくっていうのが危険だと感じて、違うことを強調したのだと思います。しかしやはり両方考えた方がいいのかなと思いました。あと、生物は学習力、変わることを本能的に持ってるっておっしゃってました。確かにそうだと思うんですけど、変化ってことは、直線的な感じの変化だけを僕らはたぶん意識しがちです。けれども変化にも種類があって、循環することも変化だし、もしかしたら変わらないことも変化なのかもしれないと思うと、その進歩主義的な考え方だけだと、ちょっと危険かなって感じました。あとは最後の方で言葉と感性を対比されてたんですけど、言葉と感性を別の物って考えちゃうと、詩って何だろう、ポエムって何だろうって思いました。詩ってというのは感性を言葉にして、成り立っているものだと思うので、もしかしたら相反するものではないかな、というように感じました。あと、となりの彼と一緒に話してて考えたんですけど、今の教育基本法から教育の目的が、人格の完成ということになっています。しかし完成しちゃうと止まっちゃうので、変化することがなくなっちゃうっていうのを考えると、これもちっと問題かもしれないと思いました。宮澤賢治が、「永遠の未完成、これ完成なり」という言葉を言ったんですけど、そういうふうに考えていけたらいいなと思いました。ありがとうございます。(拍手)

堤

ありがとうございました。本日、このフォーラムで大田先生の映画を取り上げたのには、そもそも地域交流研究センターとは、どういうセンターなのかというのを、大田先生の自然博物館構想から再確認したいという文脈がありました。映画では、大田先生が都留文科大学の学長時代に考えられた自然博物館構想を、見沼のフィールドミュージアムに関わりながらさらに深めていかれた姿が描かれていました。現在、都留のフィールド・ミュージアム（地域交流研究センター）をどうやって深く進化させていくのかというのが問われる時期にきていますが、今一度大田先生の思想に立ち戻り、いのちへの感性であったり、いのちの感覚であったりっていうことを、抽象的に考えるのではなくもっと具体的にもっと生々しく感じ考える、さらには、足場に生活を置きながら考えていくことが大切なのかもしれません。やはり、都留という地域における生活をしっかり見据えて考えていく必要があるのではないかと思います。以上で、感想交流の方はこれで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

北 垣

はい、今日はどうもありがとうございました。1部と2部これで終わりということになります。最後に、大田先生と何度も一緒に大田先生への想いを強く持っておられる杉本光司元センター長に最後のまとめをしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

杉 本

こんばんは。ただいま紹介いただきました杉本です。ちょうど平成21年度から6年間、地域交流研究センター長を務めさせていただきました。その時に大田先生と関わるようになりました。私自身は大田先生の在任の時にはお会いしていませんけれども、この映画を機会にその後交流を深めさせていただきました。そして、昨年12月23日に亡くなったということを聞いて、とても後悔していて、堤先生からも紹介がありましたけれども、この映画会

は、そういう訃報を聞く前に企画しており、もしかしたら、また大田先生に会えるかな、そんなことも期待していた中で、ちょうど、個人的な話なんですけれども、昨年10月21日に、北垣先生と一緒に映画の中にもありました、広島県の三原市にある『ほんごう子ども図書館』に行ってきました。それはなぜかという、来年度から、ほんごう子ども図書館と、都留のフィールド・ミュージアムとの交流活動を始めたいという思いがありまして、それを大田先生に伝えたんです。大田先生にもとても喜んでいただき、北垣先生と一緒に、広島に行きましたが、その前日、10月20日に偶然にも岡山県倉敷市で、この映画の上映会があったんです。そこにも参加してくれないかというお誘いを頂いて、北垣先生と二人で参加し、上映会後に感想や大田先生との関わりについてお話しする機会をいただきましたが、この映画を中心に、倉敷市では毎月上映会を開いています。ちょうど、昨日も倉敷市では映画の上映会が開かれており、今日この会が無かったら、私は倉敷に行こうと思っていました。本学でも、私がセンター長をしている時に2回上映会を開いており、今日で3回目となりますが、映画関係のスタッフの方たちのご厚意により、いずれこの映画のDVDかBlu-rayを、本学の附属図書館に置こうということで準備を進めております。そのため、教育に関わる先生たちに利用していただける機会がありましたら、利用してみてください。90分授業の中でも十分観ることができる上映時間の作品です。この映画は2012年度のキネマ旬報文化映画部門で8位にランクインされている映画でもあります。ぜひ、皆さんに、先ほどのご発言にもあったと思いますが、もっと一人でも多くの方、教員や教師を目指す学生たちにも見て頂きたい映画だなと思っておりますので、そのあたりもご協力いただければと思います。ここで宣伝にもなるかと思いますが、大田先生の『自選集成補巻』を紹介させていただきます。となりの部屋に、資料室として、大田先生のスタッフの方からたくさんの資料を送っていただき、それらを展示させていただきます。先ほど、大田先生が学生に昼休みに会ったというご発言もありましたが、それらの記録も全部隣の教室に置いてあります。カセットテープと、それから、記録です。大田先生が書いたものが置いてあります。また、これらを保存することも私たちの使命かなと考え、スタッフの方たちと相談させていただいています。この本の中で、ちょうど12章と13章に、都留文科大学と都留市民、そして、都留自然博物館について書かれています。都留に対する想い、その中で、先ほど大田先生が在籍時の入学式にて発言していた、都留文科大学の、よく間違えられることですが、文科が化ける方の化に、都留文化大学と書く人たちが多くいることですが、そのことに関しても、このように書かれています。『この小都市の一公立大学としての都留文科大学の学問、教育の個性というものをどこに求めるべきであろうか、私見として、この課題に触れてみたい。都留文科大学は、しばしばまちがえられるが都留文化大学ではない。文科大学である。』と。あくまでも文科の科がのぎへんの科だということを強調されています。それはなぜかという、『都留文科大学は都留人間研究大学なのである。現在の都留文科大学は四年制単科大学で、文学部の一学部構成になっている。学科は三つあって、初等教育学科、国文学科、英文学科からなっている。それらの学科はいずれもすべて人間研究のための学科ということが出来る。』と。都留文科大学の「科」の字がのぎへんの「科」ということの意味を改めて気づかせてもくれる本だと思います。これは定価2,800円なんですけれども、今日に限って、1,500円で隣の教室で用意させていただいておりますので、是非お手元に一冊置いていただければと思います。これもスタッフの方々のご厚意として受けとめさせていただきます。本日のしめくりですが、大田先生からはいろんな

提言をいただきました。都留文科大学についても、いつもとても気にしていただきました。その中で例えば本学の合唱団のコーラスをととても愛してくれていました。都留文科大学の合唱はとても素晴らしいということで、私は学生歌を録音した CD をお渡ししましたが、大田先生からは学生たちの生の声を聴きたいという感想を頂きました。生の声を聞く機会というと、大田先生が都留まで来ることは大変なことです、たまたま、埼玉県浦和市で 2016 年の全日本合唱コンクール関東大会(第 71 回関東合唱コンクール)が開かれたんです。そこで、合唱の指揮をされている清水雅彦先生にお願いし、大田先生を招待していただき、念願でありました学生たちの生の声を聞くことができた、とても喜んでいただきました。そしてその中で、合唱というのは一人ひとりが違っていいんだ、違ったものがつくり上げるハーモニーが素晴らしいんだ、そして、「教育はアートである」という大田先生の言葉がありますが、たくさん素晴らしい言葉を残してくれました。とても残念なことです、まだまだお顔を見たかった、お話をしたかった。後悔もたくさんありますが、今日この場所をお借りしまして、「ほんごう子ども図書館」との交流も含め、都留フィールド・ミュージアムのこれからというような思いを堤先生からもお話しいただき、地域交流研究センターが新たなスタートを切れるような機会にさせていただくということを確認させていただき、閉会とさせていただきたいと思います。本日は本当にどうもありがとうございました。(拍手)

北 垣

今日はどうも遅くまでありがとうございました。予定の時間を大幅にオーバーしてしまいましたがこれで終わりにします。最後に、大田先生のこの映画は、非常に分かりやすい言葉で語られていますが、不思議なことに見るたびに新しい発見があります。またみなさまとこうした交流の機会をつくっていきたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。今日は平日でしたけれどもお運びいただき、また夜遅くまで残っていただきありがとうございました。(拍手) それでは今日はこれで解散にしたいと思います。先ほど案内がありましたが、隣の部屋で展示をしていますので、もしお時間がありましたらお立ち寄りください。お帰り際にはアンケートをボックスに入れていただけたら幸いです。ご協力のほどよろしくお願い致します。

活 動 報 告

2018 年度

活 動 報 告

2018 (平成 30 年度)

I. 2018 年度の活動について (概況)

1. はじめに

本学は本年度より学部学科改組に伴い、2 学部・6 学科体制の中で新たな歩みを踏み出した。本センターもこれまで蓄積してきた 15 年間の活動を支えに、地域の課題やニーズと向き合いながら、地域に根ざした特色ある交流・連携と研究教育活動を進めることができた。

2. 地域交流研究センターフォーラム開催について

平成 31 年 2 月 13 日 (水) 18 時から本学 2 号館 101 教室において、第 14 回地域交流研究フォーラムを開催した。基調講演として平成 30 年 12 月 23 日に逝去された大田堯元学長のドキュメンタリー映画『「かすかな光へ」～大田堯先生からのメッセージ～』を上映し、併せて関連資料なども展示した。当日は平日の夕刻にも関わらず、70 名を超える多くの参加者が集まり、同企画への関心の高さを改めて伺い知った。今後は本学の学生向けの同企画を検討したい。

何より、本センターの運営を長年支えてこられた北垣憲仁先生が今年度よりセンターの専任教員という立場になられたことで組織運営の改革に伴う諸活動の取り組みにおいて、大きな力となったことを付け加えたい。

3. 各部門の活動

3-1 フィールド・ミュージアム部門

当部門が発足して 16 年目となる今年度は、本学の学部学科改組を踏まえ、従来取り組んできた「自然と人の交流」を大切にしたい事業のなかで培った実践や思想を振り返り、今後の当部門の活動を見通した事業計画について取り組んだ。

- ①機関紙『フィールド・ノート』の編集と発行
- ②都留文科大学附属小学校など地域の小学校への授業参加とクロボ活動への参加
- ③本学の環境 ESD プログラムと連携したムササビ観察バスツアーの開催
- ④富士急行駅舎を拠点とした展示活動
- ⑤広島県三原市の「ほんごう子ども図書館」との交流および地域交流研究フォーラムに

おける大田堯元学長のドキュメンタリー映画「かすかな光へ」の上映と展示企画

今年度計画した上記事業を恙なく終えることができた。次年度から本センターの組織改編に伴い、多様な人びとがとどろき、学ぶ共生の視点を含んだ拠点にふさわしい活動をいかに展開するかが今後の課題である。

3-2 発達援助部門

・地域教育相談室

昨年度後期より担当者不在の中、今後の運営体制についてセンター会議及び運営委員会で協議し、大学側に新規採用の要望を提案したが本年度の採用には至らなかった。

・地域インクルーシブ教育

平成 27 年度にスタートした本活動は、特別なニーズのある子どもたち（および保護者）への教育・心理的支援とインクルーシブな地域づくりを推進することを目的としている。なお、平成 29 年度より特別支援学校教職課程が開設されたことに伴い、教養学部学校教育学科の授業と当分野との連携事業となっている。

- ①特別なニーズのある子どもたちを対象にした地域の居場所づくりの活動“クロボ”
- ②特別なニーズのある若者を対象とした“キャリアデザインワーク”
- ③一般市民や現職教員・指導員を対象とした障がい理解やインクルーシブな地域づくりに関する研修

・地域情報教育

平成 19 年度にスタートした本活動は、地域を取り巻く様々な環境の変化に応じた修正を加えながら以下の活動を柱とする地域の活動に取り組んでいる。

- ①小中学校への情報教育全般に関する支援
- ②図工・美術と情報の連携した教育システム作りプロジェクト（たからばこ作戦）

・地域美術教育

大学の美術教育（図画工作）と都留の地域性を手がかりに、都留らしい学びの活動ができたらとの考えに立って取り組んでいる。今年度の活動は以下の通りである。

- ①クロボ・アート活動の指導・運営
- ②都留市立旭小学校での出張授業
- ③都留市保小連携事業「宝保育所造形教室」学生派遣指導
- ④谷村第二小学校土曜体験学習「陶芸講座」の開催
- ⑤都留市教育委員会主催子ども公開講座の指導・運営

3-3 暮らしと仕事部門

本活動は、都留市の人々の暮らしや産業について、研究や情報交流することを目的に活動を行っている。今年度も東桂地区を対象エリアとして、地域の暮らしや産業を支える“水”に注目したプロジェクトを実施した。また、これまで主対象を特定していた「研修会」及び「公開講座」を本年度より対象者を区切らず広く募り、「市民公開講座」として複数回実施することとした。

- ①都留市十日市場・夏狩地域の湧水調査研究
- ②平成 30 年度暮らしと仕事部門市民公開講座の開催（2 回開催）

4. おわりに

今年度は本センターにとって激動の1年となった。本学の大学改革に伴い、地域交流研究センターおよびCOC推進機構の再編に向けた新たな組織体制の見直しと規定の改正が求められたためである。これを受け、本センターが長きに渡り地域づくりのさまざまな活動と研究の中で積み上げてきた実績とノウハウをもとに、慎重に検討を重ね、教育研究審議会、経営審議会および理事会の議を経て新たな組織体制が誕生した。

その議論の過程において、本センターの運営に携わる私たちが確認したことは、大田堯元学長が本学学長時代にその実践の中から描かれた「都留自然博物館」という構想が、本センターの“フィールド・ミュージアム”の活動の原点である、という点である。

2003年の本センター発足以来、この理念のもとに歴史と実践を積み重ね定着したことを踏まえ、組織を貫く改編の柱として新たに“つるフィールド・ミュージアム”とすることとした。

その大田先生が、本年12月23日に逝去された。この理念を新たな体制のもと、今後、本学の学生をはじめ地域の方に広く伝えて行きたい。

なお、改編に伴ってCOC推進機構を廃止し、その機能を本センターの一部門（グローバル交流研究部門）とすることで、全国的・国際的な地域交流のネットワーク化への参画を推進できる足場を整えることができた。さらに、現行の3部門を現在取り組んでいる地域の諸活動の内容を鑑み、次年度より自然共生研究部門、共生教育研究部門、まちづくり研究部門、グローバル交流研究部門の4部門に改め、本学の多様な学科構成を横断的に、かつ幅広い領域を扱いながら、より多くの教員や学生が地域の活動に主体的に関わることができる組織再編が実現した。なお、センターが保有する膨大な地域資料の保存・活用（教材化）を担当する調査・研究部門とセンター事業の広報活動全般を担当する広報・出版部門を新たに加えた。

今後は、大学と地域をつなぐ開かれたセンターとして、子どもたちをはじめ子育て世代や高齢者、一般市民、外国人留学生、卒業生等に向けた多様な新規事業を企画運営してゆきたい。

（文責：竹下勝雄）

Ⅱ. 各部門の活動

Ⅱ－１. フィールド・ミュージアム部門

【平成 30 年度の活動概要】

フィールド・ミュージアム部門は、2003 年に地域交流研究センターが発足すると同時に一部門として位置づけられてから 16 年目を迎えた。この間、「自然と人との交流」をテーマに、「もの」が生み出された文脈から資料を切り離すのではなく、「もの」のもつ本来の意味を問う活動を展開してきた。本年度は、本学が 2 学部・6 学科体制となることをふまえて、従来取り組んできた事業とともに、これまでの実践や思想を振り返り今後の部門の活動を見通すことをテーマとした事業を新たに計画した。おもな活動は次の通りである。

1. 機関誌『フィールド・ノート』の編集と発行
2. 都留文科大学附属小学校など地域の小学校への授業参加とクロボ活動への参加
3. 本学の環境 ESD プログラムと連携したムササビ観察バスツアーの開催
4. 富士急行駅舎を拠点とした展示活動
5. 広島県三原市の「ほんごう子ども図書館」との交流および地域交流研究フォーラムにおける大田堯元学長のドキュメンタリー映画「かすかな光へ」の上映と展示企画

今年度計画した事業は予定通りに終わることができた。2019 年度から地域交流研究センターが組織改編するにともない、多様な人びとががつどい学ぶ共生の視点を含んだ拠点にふさわしい活動をいかに展開するかが課題となる。

【活動の状況】

1. 機関誌『フィールド・ノート』の編集と発行

フィールド・ミュージアム部門では、学生が主体となり編集・発行する部門の機関誌『フィールド・ノート』を年 4 回発行している。この事業は 2002 年に始め、2018 年度に 100 号を発行することができた。2018 年度も本学の学科・学年の枠をこえて 18 名の学生がこの編集作業に参加した。この編集作業では、学生自らが企画をたて、地域に出て自然を観察したり人に取材をしたりして記事を書く。週に 1 度、編集会議を開催し記事の課題などを話し合う。そのようにして校正を重ねて最終的に冊子を完成させる。2018 年度は各号 700 部を発行したが、購読希望が多く残部はほとんどない。また全国から購読の希望があり、毎号約 150 部を郵送している。

平成 30 年度の発行状況は次の通りである。

- 97 号：2018 年 6 月発行、2700 部（オープンキャンパス用に 2000 部発行）
- 98 号：2018 年 8 月発行、700 部
- 99 号：2018 年 12 月発行、700 部
- 100 号：2019 年 3 月発行、700 部

7月に開催されたオープンキャンパスには、2日間にわたり『フィールド・ノート』編集部の学生がキャンパスツアー担当として参加し、その際高校生に『フィールド・ノート』を配布した。高校生や保護者にも好評で、平成31年度の入学生の中にもこの『フィールド・ノート』をみて部門の機関誌編集に参加している学生がいる。

本年度、読者からは次のような感想が寄せられた。

- ・「地域へのていねいな目の向け方と掘り下げ。いつもしみじみと感心しながら拝読しています」
- ・「今号の表紙のように、夕立のあと、一文字に口を閉じるアマガエルに出会うと、今まで軽々しく不満を口にしながら生きてきた我が身を反省しています」
- ・「フィールド・ノートが届くと心がぱあっと明るくなります」
- ・「よく細かな事まで発想できるなって驚いています」
- ・「自然豊かな都留のまちを、学生さんたちの瑞々しい眼を介して散歩しているような気持ちになります」
- ・「私たち市民が気づいていない事をたくさん気づかせてくれます」
- ・「おかげでまちがちがった視点で見られるようになりました。今までとはちがった時間を過ごせるようになりました。ありがとうございました」

機関誌編集に参加している学生は、地域で自然や人びとと交流することで学びを確かなものにするだけでなく、読者から多くの励ましを受けている。その励ましが学生の学びや成長を強く支えているようである。

2. 都留文科大学附属小学校など地域の小学校への授業参加とクロボ活動への参加

地域の自然をていねいに観察し親しむことを目的として都留文科大学附属小学校など地域の小学校での授業を行った。また領域をこえた分野との協働した取り組みとしてクロボ活動（環境学習）に参加した。

小学校における授業は次の通りである。

①都留文科大学附属小学校（7回）

4年生（12名）を対象とした野外での理科授業（5月11日、5月29日、6月22日、7月6日、10月9日、10月30日、12月11日）

②上野原市立島田小学校5年生対象（11月12日）

③上野原市立上野原小学校5年生対象（10月23日）

上記のほかに次の2講座を担当した

①宝小学校6年生対象の講座（10月31日）

②子ども公開講座（11月11日）

都留文科大学附属小学校では、1回につき2時限を用いて環境学習の授業を行なった。どの学校・講座でも「身近な動物の暮らし」をテーマに可能な限り学校周辺の森での観察と室内でのまとめという構成にした。

クロボ活動では、環境学習に関心のある学生4名が参加した。自然物を使った観察と工作を柱としたもので、事前学習と準備に1ヶ月ほどかけた。この活動は領域をこえた協働の機会でもあり、フィールド・ミュージアムの理念とも重なることから継続して取り組みたい。

3. ムササビ観察バスツアー

ムササビは都留市のシンボルとなる動物であり、幅広い年代層に人気の動物である。高尾山をはじめ全国各地で観察会が開催されている。このムササビ観察の手法を編み出したのは、本学の今泉吉晴教授である。可能な限り動物の生活への干渉を少なくし互いにいい関係を築きながら身近な自然との共生を考えていくという思想がそこにある。この思想を受け継ぎ、地域の自然の魅力や共生のあり方を考えていく取り組みとして、「ムササビ観察バスツアー」を企画した。昨年度から、安全・環境に配慮する点からバスを利用することとした。また学生の学習の場として、本学の環境ESDプログラムと連携して学生をスタッフとして受け入れることにした。なお、環境ESDプログラムの実習に必要な時間数が45時間とされているため、1回の観察会に9時間とし春と秋に計5回開催することとした。

開催日は次の通りである。本学の教員・学生も参加しやすいように金曜日にも2回開催した。学生スタッフは10名であった(国文学科1名、初等教育学科2名、社会学科環境・コミュニティ創造専攻6名、社会学科現代社会専攻1名)。

①5月26日、②6月8日、③11月16日、④11月17日、⑤12月1日

参加者からは次のような感想が寄せられた。

- ・「飛ぶ姿に感動です。本当に飛ぶんですね」
- ・「まるで飛行機雲のような飛び方をしていました。また来たいです」
- ・「学生のみなさんありがとうございました。来年もムササビの成長を見に来たいです」
- ・「この会はとてもいいです。ぜひ来年もこの会を開いてください」
- ・「大自然のなかに未だ知らないいのちが一生懸命に生きている姿に感動しました」

このプログラムは、市民と学生がムササビを通して（実物を通して）交流するという特徴がある。そのため学生スタッフの満足度も高い。本学の博物館実習などの実習に対応できないか検討していきたい。

4. 富士急行駅舎を活用した展示活動

地域交流研究センターおよびフィールド・ミュージアム部門の活動を広報し、ゆるやかな

交流の輪を広げる目的で取り組んでいる事業である。これまで、富士急行と連携して都留文科大学前駅の駅舎をフィールド・ミュージアムの分館として位置づけた展示活動を続けてきた。昨年度は年3回の企画展を開催し、富士急行と都留市と連携した「駅からハイキング」にも参加した。

①富士急行線の駅舎での展示活動

平成30年度は年3回の企画展を開催した。それぞれ「自然」、「織物」、「神楽」をテーマに展示を行なった。華道サークルの生け花も駅舎の利用者に好評であった。

②富士急行および都留市と連携した「駅からハイキング」事業

平成30年度は昨年度に続き2回目の共同開催となった。富士急行線の東桂駅から都留市駅までハイキングをしながら都留市の自然や文化にふれることをテーマに、10月21日から11月4日まで開催した。フィールド・ミュージアム部門では、『フィールド・ノート』の学生スタッフが参加者に都留市の魅力を紹介するなどして交流した。

5. 広島県三原市の「ほんごう子ども図書館」との交流および地域交流研究フォーラムにおける大田堯元学長のドキュメンタリー映画「かすかな光へ」の上映と展示企画

「ほんごう子ども図書館」は大田堯元学長が自らの土地を寄付し民間で運営する公設民営の子ども図書館である。大田堯元学長は、都留自然博物館構想の提唱者でもあり、「見沼フィールド・ミュージアム」の構想に取り組んでこられた。それらの構想は、フィールド・ミュージアム部門の実践や思想の原点とも言え、「ほんごう子ども図書館」を訪問し交流するというのは長年の夢でもあった。2018年10月21日・22日に本学の杉本光司教授とともに「ほんごう子ども図書館」への訪問が実現した。また同年12月23日に逝去された大田堯元学長のドキュメンタリー映画を2019年2月13日、地域交流研究センターのフォーラムの基調講演として上映し、併せて関連資料などを展示した。

6. 平成31年度の事業に向けて

平成31年度は、フィールド・ミュージアム部門が「自然共生研究部門」と名称を変え、地域交流研究センター全体で「つるフィールド・ミュージアム構想」の実現に向けて取り組んでいくことになる。そのためにもつねに原点に立ち返りながら地域で学び交流する意味と可能性を問い続けていく。具体的には次のような事業を計画している。

1. 機関誌『フィールド・ノート』の編集・発行
2. 地域の小学校の授業への参加およびクロボ活動への参加
3. 富士急行線の駅舎を活用した展示活動
4. 環境ESDプログラムと連携した「ムササビ観察バスツアー」
5. 広島県三原市の「ほんごう子ども図書館」との交流
6. 大田堯元学長の「かすかな光へ」の学生を対象とした上映会

以上のような事業をつねに点検しながら、共生と学習の拠点にふさわしい取り組みを目指したい。

(文責：北垣憲仁)

Ⅱ－2. 発達援助部門

Ⅱ－2－1. 「地域情報教育」

1. 活動指針

2007 年度（平成 19 年度）から地域交流研究センターにおける活動の柱の一つである「発達援助部門」の中の分野の一つとして「地域情報教育」として取り組んでいる。

「地域情報教育」における活動の指針として当初提示されたものからは、取り巻く情報に関わる環境の変化とともに修正をしつつ、現在は、次の（１）・（２）を掲げているものの、（１）については、ここ数年はほとんど活動していないが、新しい学習指導要領の発表や情報センターでの新任教員の採用もあり、現場の先生方とも相談しつつ何かしらの活動を行うことを目標としている。（２）については、2011 年度から初等教育学科（現・学校教育学科）図工・美術教室の鳥原先生が中心となって活動している、地域への美術教育支援プログラムの中で、都留市内では旭小学校をフィールドとした、図工・美術と情報の連携した新しい図工・美術教育システム作りプロジェクト（たからばこ作戦）を活動の一つとして加えたことにより、平成 27～29 年度には科学研究費挑戦的萌芽研究にも採択され、引き続き注目度の高い活動をしている。

（１）小中学校への情報教育全般に関する支援

- ・都留市情報教育研究委員会（教育委員会、全小中学校情報教育担当者）への協力
- ・ICT を利用した学校業務に関する研修会の開催
- ・小中学校情報教育への支援
- ・大学と小中学校間での遠隔授業の実施

（２）図工・美術と情報の連携した教育システム作りプロジェクト（たからばこ作戦）

- ・旭小学校、子どもアトリエ（兵庫県西宮市）を協力校・組織とする。
- ・保護者への説明、作品の撮影及び利用に関する許諾を得る
- ・交流支援
- ・「DIGITAL ずこうしつ」の運用

今年度は、これまでの活動の評価・点検に重点をおき、改善点の洗い出しやこれからの活動方針の作成に向けてプロジェクト関係者の意見の集約を中心に行ったため、新規事業の実践は行わなかった。これまでの様々な実践活動の中で、本プロジェクトが一つの手段として立ち上げた「たからばこ作戦」の実践研究用サイトと本活動の広報用として立ち上げた公開用のサイトについての外部レンタルサーバーの使用についても将来的な活用の方策や予算運用等の面からも検討を続けていく必要がある。

2. 平成 30 年度の活動

1) 平成 30 年 5 月 27 (日) 西宮市 ギャラリー小さな芽

「子どもアトリエ」の年 1 回の展覧会である「さつき展 2018」への参加と作品の撮影、今後の活動内容についての打ち合わせ。

2) 平成 30 年 6 月 13 日 (水) 16 時 (鳥原、杉本) 都留市立旭小学校

平成 29 年 10 月に実施した旭小学校における「出張デジタル図工室」での取り組みの状況を、朝日新聞社発行「国公立大学進学のおすすめ」に記事と写真を提供するにあたり、その掲載許可のお願い。(これに対し、子どもの写っている写真への配慮を要望された)

3) 平成 30 年 7 月 11 日 (水)

朝日新聞『国公立大学進学のおすすめ』発行

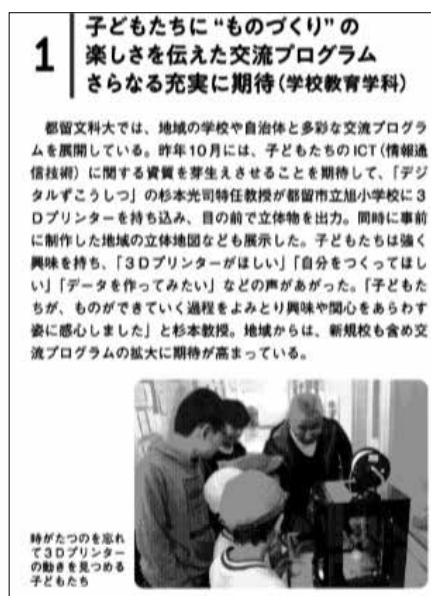
「Campus Topics」のコーナーに、3Dプリンター活用の取り組みが紹介された。

4) 平成 30 年 7 月 26 日 (木) 14 時 50 分 (杉本)

「digital ずこうしつ」の日常的利用と運営補助員として参加したいという社会学科 2 年生の 3 名が相談に来たため、実現に向けての説明を行った。

5) 平成 30 年 8 月 2 日 (木) 10 時 50 分

朝日新聞社発行「AERA」からの取材が「DIGITAL ずこうしつ」で行われた。



6) 平成 30 年 8 月 23 日 (木) 15 時 (鳥原、杉本) 都留市立旭小学校

発行された朝日新聞『国公立大学進学のおすすめ』を届けた。

7) 平成 30 年 12 月 27 日 (木) ~ 28 日 (金) 13 時 ~ 19 時

『レーザーカッターに必須のイラストレーター講座』の受講

主 催: (株) メイカーズクラブ

会 場: 荒川区南千住 8-5-7 はなみずき通り北四番館 3 階 304 号室

受 講 者: 杉本光司

【講座内容】

1 日目

1. レーザーカッターの説明
2. Illustrator の説明
3. レーザーカッターの基本的な加工法を学ぶ
4. 既に販売されているモデルを作りながら、レーザーカッターでの製品作りを学ぶ

2 日目

1. 立体的なものを作るための加工として、接着不要で箱を組める「ほぞ組み」や、



扉の回転軸、曲面をつくるリビングヒンジなどを作成する

2. レーザーでの基本的な加工データを実際に作り、作成したデータを実際にカットする
3. 製品を作成する

8) 平成 31 年 3 月 1 日（金）～2 日（土）（杉本、大輪、鳥原（2 日のみ））

西宮市こどもアトリエ

1 日目は、これまでのデータの確認、現状の Web システムの課題と将来計画について上田さんからの要望を聞いた。また、昨年 5 月に開催された『さつき展 2018』のデータを確認し受け取った。

2 日目には、鳥原先生も加わり、プロジェクト『たからばこ作戦』の今後の展開、将来計画、現状における課題等について話し合いを行った。

9) 平成 31 年 3 月 12 日（火）15 時 30 分～17 時 鳥原、杉本、大輪、永井（ものづくり大学准教授）

たからばこ作戦における DB システムと DB ソースの今後の運用について、現行の外部サーバーレンタル利用から新たな方策を検討する。サーバー運用をお願いしている（株）CMS コミュニケーションズの永井さんが退社し、ものづくり大学の教員となったため、田沢さんが新しい担当者となった。なお、永井さんとは今後も本プロジェクトに関する協力者として参加頂けることを確認した。



3. 令和元年度における活動予定

- ①新しいフィールドとして小学校を一校増やす。
- ②「DIGITAL ずこうしつ」を利用した市民公開講座の新規開講
- ③図画工作以外の科目に対しての支援の可能性を調査する。
- ④都留第二中学校の科目「技術科」の情報分野に関する 3 年生 4 クラスの授業担当

（文責：杉本光司）

Ⅱ－2－2. 地域美術教育

【2018 年度の活動の振り返りと 2019 年度の活動に向けて】

2018 年度も地域の方々のご協力により、充実した活動を行うことが出来ました。関係頂きました方々へ心より感謝申し上げます。2019 年度も引き続き、地域の方々と大学がともに活動を積極的に進め、地域の活性化に貢献できるよう計画して参ります。

この地域交流の場は、多くの人とのコミュニケーションの出来る場であり、教員、大学生にとって貴重な学びの場となっています。また、子どもたちにとって、豊かな時代を作って

いくきっかけとなるような活動の場を目指しています。

私たちは、「大学の美術教育（図工）」と「都留の地域性」を手がかりに、都留らしい学びの活動ができたと考え活動を進めてきました。都留文科大学に在籍する学生は全国各地から集まっていることから、多様な地域性や文化に触れることが出来ます。今後、大学周辺地域にとってこういった人材が活性化の原動力となると考えています。

都留市保小連携事業「宝保育所造形教室」では、都留文科大学の図工・美術教室在籍の学生が指導を行いました。活動内容は、「顔」をテーマに行いました。園児達に自宅等で使わなくなった小物や外で拾った木の実や枝などを集めてもらい、造形活動の素材として使用しました。持参してもらった素材には、園児にとって大切な思い出のあるものが多くあり、それらを使い造形活動を行いました。思い出のある素材ならではの使い方があり、生き生きとした自由で大胆な「顔」の制作ができたと思います。大学生も子どもの自由な発想に大いに刺激を受けていました。

都留市教育委員会主催の子ども公開講座では「木切れを使ったオブジェ制作」を行いました。大学の授業中に使用した木材の木切れを素材として使い、組み合わせて形を作り、色を塗って表す活動を行いました。いろいろな形の木切れを自由に選び、自分のイメージを表す造形活動です。子どもたちは数多くある木切れを楽しみながら互いに話をしながら選び、それらを接着剤で接合し、新しい形を作りました。出来上がった作品は机に並べ、鑑賞活動を行い、自分の表した作品に関して積極的に発表していました。

美術教育（図工）の分野は「かたち」や「色」を扱う分野で、モノを創造的に表現します。子どもは、身の回りの出来事や目に映るモノに常に心を動かしています。私たちの造形活動では、子どもたち自身が主体的に関わりながら、作り出す楽しさや感動を得られるように考えています。子どもたちは、他の人の作るモノと自分のモノの作り方や出来上がりによって、他の人との考え方や感じ方の違いに気づき、互いの価値観を認め合いながら成長していきます。それは、言葉だけでは感じ取りにくい「かたち」や「色」を通して養える学びであると考えます。私たち教員も学生とともに、これらの活動の意義を再確認し今後の活動へとつなげていけるものと考えています。

【活動の状況】

○クロボ（クロスボーダー・プロジェクト）「アート活動」の指導・運営

6月16日 シャボン玉アート造形活動

12月8日 紙漉き体験

○都留市立旭小学校での出張授業

10月19日 陶芸体験 板づくりマグカップ制作

○都留市保小連携事業「宝保育所造形教室」学生派遣指導

7月6日 いろいろな素材で「顔制作」造形活動

※宝地域協働のまちづくり推進会主催「第11回七里まつり」会場：宝小学校展示作品

2月15日 透明なビニールに描く造形活動

○谷村第二小学校土曜体験学習「陶芸講座」の指導

10月27日 陶芸体験 板づくりマグカップ制作

○都留市教育委員会主催子ども公開講座の指導・運営

7月21日「木切れを使ったオブジェ制作」



都留市保小連携事業「宝保育所造形教室」学生派遣指導 活動風景と作品

(文責：青木宏希)

Ⅱ－２－３．地域インクルーシブ教育

1. 地域インクルーシブ教育分野の目的

地域インクルーシブ教育分野は、特別なニーズのある子どもたち（および保護者）への教育・心理的支援とインクルーシブな地域づくりを推進することを目的としている。この分野の主要な活動は以下である。

- ①特別なニーズのある子どもたちを対象にした地域の居場所づくりの活動“クロボ”
- ②特別なニーズのある若者を対象にした“キャリアデザインワーク”（※“キャリアデザインワーク”は、クロボのグループ別活動の1つとして展開）
- ③一般市民や現職教員・指導員を対象にした障がい理解やインクルーシブな地域づくりに関する研修

2. 活動の内容

2018年度については、①～③について計画どおり展開できた。以下では、個々の活動の内容について簡単に示すことにしたい。

①特別なニーズのある子どもたちを対象にした地域の居場所づくりの活動“クロボ”

これは、「クロスボーダー・プロジェクト」という活動である。「健常者と障害者の境界（ボーダー）を超える」という意味で名称を「クロスボーダー」とし、かつそのプロセスとして地域の方々とは「コラボ（連携）」してやっていきたいという意味で通称を“クロボ”とした。

2018年度は、大学の学期中（4月～7月、10月～1月）月1回土曜日に10時～15時で実施した。2018年度は、5月19日、6月16日、7月21日、10月20日、11月10日、11月11日、12月8日の計7回開催した。参加する知的障害・発達障害のある子どもメンバー（小・中・高生）は基本的に1年間固定で、2018年度は24名が参加してくれた。

活動の中では、口話・手話（ジェスチャー）・絵カードなどの多様な言語・非言語的コミュニケーションを意識的に使用することで、コミュニケーションをバリアとしない環境づくりをこころがけた。

毎回、平均50名ほどの学生や市民がボランティアとして参加し、のべ人数では、120名を超えるボランティアが関わってくれた。学校教育学科（初等教育学科）特別支援学校教職課程の「特別支援フィールドワークⅠA」「特別支援フィールドワークⅠB」を受講する学生も、学生ボランティアとして参加した。

<前期>

- ① 5月19日（土）午前：ホッケー 午後：ことば、アート、キャリア
- ② 6月16日（土）午前：ホッケー、フリスビー 午後：ことば、アート、キャリア、
- ③ 7月21日（土）午前：ホッケー、フリスビー 午後：音楽、キャリア

<後期>

- ① 10月20日（土）午前：ホッケー 午後：音楽、環境、キャリア、
- ② 11月10日（土）午前：ホッケー、キャリア 午後：ことば、キャリア
- ③ 11月11日（日）午前：キャリア 午後：キャリア
- ④ 12月8日（土）午前：ホッケー、フリスビー 午後：音楽、アート

クロボは、午前が全体活動、午後がグループ別活動としている。各回の活動の様子については、写真とともに、地域交流研究センターブログに掲載した。

②特別なニーズのある若者を対象にした“キャリアデザインワーク”

□概 要

本事業は2015年度からクロボのグループ活動の一つとして開催されてきた。2017年度からは特別支援学校教職課程が開設されたことに伴い、当該課程のフィールド科目「特別支援フィールドワークⅡ」（集中講義）として位置付けられ、原まゆみが担当した。特別なニーズのある中高生の将来イメージ形成に寄与するキャリアプログラムとして年間6回実施した。実践のまとめ冊子を作成し成果を確認するとともに、山梨大学附属特別支援学校公開研究会でポスター発表を行った。

□参加者

中高生の当事者10名、地域の専門家による運営委員11名、大学生11名であった。

□運営委員（地域の専門家）

天野徳江（NPO法人 おもちゃ図書館はばたき 理事長） 山口裕喜（障がい者就業・生活

支援センターありす 就業支援ワーカー） 井上弥生（フリースクール オンリーワン 代表）
 渡邊浩太郎（山梨県立ひばりが丘高等学校 教諭） 丸山博稔（山梨県立やまびこ支援学校 教諭）
 福永美奈（都留市立谷村第一小学校 通級指導担当教諭） 田巻典子（笛吹市立一宮西小学校
 情緒障害学級担当教諭） 内川大輔（県立高等支援学校桃花台学園 教諭） 小池美樹（保護者・
 放課後等デイサービス事業者） 親の会「ぶどうの会」代表者・会員

□職場提供者

職場体験にご協力下さる事業所等は 10 カ所以上、今年度はそのうち次の 4 カ所で体験させていただいた。暖かい理解のもとで貴重な体験ができたことを感謝している。（曾雌ニンニク生産協同組合、不二家東桂店、都留どうぶつ病院、特養老人ホームまごころの里）

□ワーク実施内容

目標 ○自分はどんな大人になりたいか、仲間と一緒に考えてみよう。

○どんな仕事が向いているか、職場体験をしてみよう。

○将来の夢や希望をつかみ、今できることに取り組もう。

内容（場所：3 号館 204 号室）

No	日 程	内 容
1	5 月 19 日(土) 13 時 10 分～15 時	○ワークの概要説明 自己紹介 テーマソング「さんぽ」 ○仲間づくり「よろしくねブック」を作ろう。
2	6 月 16 日(土) 13 時 10 分～15 時	○お仕事インタビューをしよう。 守衛室の守衛さん 図書館の司書さん 小学校の先生
3	7 月 21 日(土) 13 時 10 分～15 時	○友達と一緒に「お仕事マップ」を作ろう。 ○関心のある職業を図書館で調べよう。
なつやすみ		
4	10 月 20 日(土) 13 時 10 分～15 時	○仕事の模擬体験「ケーキ屋」の菓子折り詰め合わせ作り 報酬と買い物体験 ○職場体験場所を決めよう。
5	11 月 10 日(土) 終日 10 時～15 時	○希望の職場で仕事体験をしよう 曾雌ニンニク 4 人、不二家東桂店 1 人、都留どうぶつ病院 1 人、 特養老人ホームまごころの里 2 人 大学生が一緒に参加。（移動は自力または委託タクシー）
6	11 月 11 日(日) 終日 10 時～15 時	○職場体験の振り返り 体験報告とまとめシート作成 ○一年間のまとめ

□成果と課題

今年度は高校、特別支援学校高等部卒業生が継続参加を希望したため、社会人の若者も参加する形態となった。先輩の存在は新しく参加した中学生たちへのモデルともなり異年齢集団の意義が生まれている。昨年度の本田秀夫氏の講演会を契機に本ワークへの関心を持った笛吹市や平塚市からの参加者があった。こうしたワークへの期待が大きいと感じる。

学生はフィールドから直接学ぶ貴重な機会として企画運営に主体的に取り組み、テーマを

「きょうどう」と設定し子ども理解、支援方法、協力心などの成長がみられた。また毎回まとめを行い地域交流研究センター大学 HP のブログに情報発信した。運営委員は新たに高等支援学校、小学校情緒学級担当、放課後等デイサービス事業者が加わり、それぞれの持ち場で起きている課題を意見交換する貴重な機会となった。特に高校における支援課題が議論され、喫緊の課題として県教委特別支援担当へ情報提供を行った。近年、保護者の養育に関する情報交換の場が減っていることから、新たに「保護者の語り場」を設定し経験を交流を深めた。職場提供者は、参加者の希望に応え動物病院、老人ホームを開拓し快諾いただいた。動物に関心のある参加者は高校を卒業してアニマル関係の専門学校への進路を決め、職場体験の意義が確認された。課題は、参加者にとっての成果を丁寧に見ていくこと、学生の学びを検証すること、保護者の交流機会を充実させること、こうしたプログラムに関心のある方に情報発信すること、大学としての運営基盤を整え安定的に継続発展させていくことなど多くある。3年目に向けて改善充実していきたい。

③一般市民や現職教員・指導員を対象にした障がい理解やインクルーシブな地域づくりに関する研修

2018年度は、以下に示す研修を、実施した。

・「ミュージック & マジック講座」

10月20日13時30分～15時に特別なニーズのある子どもと保護者および学生に向けてマジシャンの佐藤比呂二氏をゲスト講師にお招きし、約40名の参加者と共に楽しいひとときを過ごすことができた。最初に音楽科の学生のリードによる「イントロクイズ」や季節の歌を歌ったのち、マジシャンが登場し、消えたはずのコインが身体のあちこちから出てきたり、絵に描いたスプーンに呪文を唱えると絵のスプーンも本物のスプーンもいつの間にか曲がってしまったり、乾杯のかけ声とともにかざした紙コップがシュルシュルとほどけてカラフルなりボンになる等、次々に繰り広げられるマジックに、参加者一同目をみはり、ともに笑い、たくさんの不思議を経験する時間となった。中には席を立ててその都度確かめに行く子どももいるなど、好奇心旺盛な姿が見られた。また、マジックショーを終えた後、指導員や学生にむけてマジック講習会を行なった。

(文責：堤英俊、原まゆみ、齋藤淑子)

Ⅱ－3. 暮らしと仕事部門

1. 平成30年度の活動概要

暮らしと仕事部門では都留市の人々の暮らしや産業について、研究や情報交流することを目的に活動した。平成30年度も引き続き対象エリアを東桂地区とし、地域の暮らしや産業を支える“水”に注目した「都留市を流れる水と暮らしと農のかかわりを探るプロジェクト」を実施している。平成30年度も社会科学的分野の担当者が不在であったため、自然科学的分野についてのみ現地データの収集・解析を行った。事業に関して、平成30年度までは学生を主対象とした「研修会」と、都留市民を主対象とした「公開講座」を実施していたが、

どちらの事業も学生・市民共に参加してくださる実態が明らかとなってきたので、本年度より対象者を区切らずに全て「市民公開講座」として複数回実施することとした。以下にその詳細を述べる。

2. 活動の状況

2-1. 都留市十日市場・夏狩地域の湧水および水環境調査研究

調査地域には、古富士火山が山体崩壊して桂川の溪谷に流れ込んだ古富士泥流堆積物の上に、新富士火山初期の活動期に噴出した猿橋溶岩と桂溶岩の2層が分布している。都留市が利用する富士山からの湧水は、後者の桂溶岩中を流動した地下水がその末端崖より湧出している。この湧水に関して、十日市場の永寿院の敷地を借用して、平成27年度から継続して自記水位計による連続水位および連続水温観測と、水位を湧水量に換算するための定期流量測定を実施している。以下に、平成30年度の湧水量の変動を報告する。

湧水の水温変化については、強度の強い雨の影響を除くと平成29年度は12.5℃～13.3℃の0.8℃差で推移したのに比較して、平成30年度は12.1℃～13.7℃の1.6℃と水温差が倍ほど大きかった。また水温変化特性も、平成29年度は最低水温が3月～5月半ば、最高水温が9月～11月半ばと長く続いたのに対して、平成30年度は最低水温が5月半ば～6月半ば、最高水温が11月～12月初頭と比較的短かった。このパターンは最低水温の値は異なるが、平成28年度と類似の変動であるため、平成29年度が特異である可能性もある。観測期間が短いため現況ではまだ充分な解析ができないが、今後もデータ収集に努めたい。湧水量に関しては、平成29年度が700～800m³/日で安定していたのに比較して、平成30年度は変動量が大きく湧水量の少ない時期が長く続いた。平成30年3月までは前年度から引き続いて800 m³/日程度湧水していたが、4月に入ると急激に減少し、9月に来襲した台風の影響を除いて11月半ばまで700～600m³/日程度で推移した。11月半ば以降湧水量は急激に増加し、12月末まで800m³/日を維持している。湧水量の変動特性は観測を開始して以降、年毎に異なる。今後、その変動要因を解明することが課題である。

その他、東桂地区内の水環境を検討するために、平成28年12月(冬季)と平成29年8月(夏季)に地区内で一斉採水した湧水(6地点)・用水(20地点)・河川水(6地点)の水質分析結果について報告する。湧水はpH7程度の中性であったが、用水および河川水はpH8前後の弱アルカリ性を示す地点が多かった。主要な溶存イオンはいずれもHCO₃⁻-Ca²⁺型を示す一般的な水質であったが、冬季に比較して夏季にCaイオンが多くなる傾向が認められた。また、NO₃⁻-Nは夏季に多くなるが、いずれも7mg/L未満で環境基準の10mg/Lよりも低い値を示した。しかし、PO₄³⁻は用水で5mg/L程度の値を示し、中には10mg/Lより大きい値を示す地点もあった。ほとんどの用水は夏季にのみPO₄³⁻が認められるが、高い値を示す地点やより下流側の地点では冬季も検出された。

2-2. 平成30年度 暮らしと仕事部門市民公開講座

平成30年度の市民公開講座は平成30年6月9日と12月19日の2度実施した。

(1) 熊本県の地下水保全の取組み－熊本地震の経験から－

講師に熊本県 環境生活部環境局 環境立県推進課主幹の清藤 匡氏をお迎えして、熊本県における地下水保全の現状について、平成 30 年 6 月 9 日に講演していただいた。参加者は 25 名であった。

熊本県が地下水に関わる条例である「熊本県生活環境の保全等に関する条例」を制定したのは昭和 44 年 4 月と岐阜県の「公害防止条例」昭和 43 年 12 月に次いで 2 番目に早い。また、地下水採取規制・水源地域保全のための規制・水質保全のための規制・その他の規制を内容に含む「地下水保全条例」を県単位で施策している都道府県は熊本県のみである（環境省、2018）。熊本県熊本地域（熊本市及びその周辺の 11 市町村の区域）は阿蘇火山の山麓にあり、約 100 万人の県民の水道水源をほぼ 100%地下水から得ていることから、富士山の近傍にあり地下水が水道水源である都留市との共通点が多く、今後都留市の地下水を保全していくうえで、地下水保全の先進県である熊本県から学ぶことが多くあると考え、本講座を企画した。熊本県では古くから水文地質調査が実施され、水循環の観点から地下水保全に取り組んでいる。その背景には、都市化による地下水涵養域の減少が要因となって地下水量が減少したことや、果樹園などの肥料に起因する水質悪化が発生したことがあげられる。その対策として例えば、阿蘇外輪山に近い白川上流域は地下水の涵養域にあたることから、冬季に休耕している水田に水を張って地下水涵養を促す事業を官民一体となって実施している。また、地産地消タイプの酪農の推奨、くまもとグリーン農業の推進などに取り組んでいるとのことであった。更に県民の地下水に対する関心を高めるため、「熊本は地下水の恵みあふれる水の国－水の国くまもと」というスローガンのもと、県庁前に地下水が流動する地層の説明看板と共に常時その時の地下水位の表示、また幼稚園児への水のお話会という絵本の読み聞かせや、小学生を対象とした水の学校、中学生を対象とした水の作文コンクール、高校生を対象とした水の国高校生フォーラムなど、水についての教育にも熱心に取り組んでおられることを紹介していただいた。もちろん、県民代表として“くまモン”も一役買っているようだ。その成果が認められ、国連事務局が世界の各都市で行われている優れた水管理の取組みを推進するために、2005－2015 を“生命の水（Water for Life）”行動のための国際 10 年と定め、特に顕著な取組み事例を表彰する“生命の水（Water for Life）”最優秀賞（水管理部門）として、熊本県が日本で初めて 2013 年に表彰されたことは誇らしいことと感じた。

熊本県は平成 28（2016）年 4 月 14 日に熊本地震に見舞われた。この地震により甚大な被害が発生したが、その生々しい被害写真を時に声を震わせながら説明していただいた。筆者は授業で地学を担当しているため、防災（減災）教育分野も取り扱っている。そのため報道でも熊本地震の被害状況は幾度となく見ているが、現地の方が撮られた写真を見ると、改めて被害の大きさに胸が痛んだ。このように大きな地震災害の場合はインフラ設備も大きなダメージを受け、一部の地下水も枯れたそうだが、概して地下水は災害に強いことを実感されたそうである。現在、地下水は防災井戸として注目を集めているが、その実践的な事実を知ることが出来たのは大きな収穫であったと感じる。

熊本県は地震の後にも風水害などの災害に見舞われ、清藤さんも県庁職員として大変お忙しかったことと推察するが、講演の依頼に対して快く引き受けてくださり、丁寧に準備していただいて大変貴重なお話を聞かせていただいた。この場を借りて、改めて謝意を表する。

以下に、講演会後に書いていただいた参加者の感想を紹介する。なお、職業欄が空欄だった参加者は「一般」とした。

アンケート結果

- ◆私自身熊本出身で、水教育などは受けた記憶がありました。紹介されていた取り組みが当たり前ではないと感じました。熊本地震の経験からというタイトルで県庁の方からお話いただけるということで、県での震災に対する対応や被災後であるからこそお聞きできるお話を期待していたのですが、その点が少し薄く残念でした。熊本での水への取り組みの成果・課題、またその先（解決策）などの現状をうかがいたかったです。（本学2年生）
- ◆主専攻は西アジア史なので、着目するのは地下水路（qana-t）や天水地と砂漠地帯の差異などになることが多かった。また、熊本という地域に感心が特にあったこともなかったもので、今回は非常に自分の盲点を衝く内容で知覚を刺せしめられたと同時に、自分が自分の身近なことにいかに無関心であるかを理解した。（本学2年生）
- ◆私の本家は農家で幼いころから稲作や畑仕事に親しんできたので、水と生活との関わりや熊本のPR活動についてとても身近に感じながら聞くことができました。また、沿岸部に住んでいたため震災の被害を写真で見られたことでより危機感をもつことができました。地下水の量と質の両面を保全するための制度や組織の取り組みの内容はたいへん興味深く聞かせていただきましたが、節水したり野菜を消費したり自分にできる範囲で貢献していきたいと考えました。（本学2年生）
- ◆地下水の保全と取り組みについてもなんですが、熊本地震からの対応と対策に関心を持ち今回参加させていただきました。私自身も東日本大震災を経験していて、蛇口から出る水を飲むことができない状況下にいました。幸いにも近所の井戸と山の沢水があったので何とか乗りきることができました。災害時の「水」もですが普段の生活にあたり前な水の存在について考え直す機会になりました。私の地元では、「水」に関してどのような対策、規定を作っているのか、現時点で知らないことは問題だなどと思返すことができました。あと、今回はじめて「水の国くまもと」を知りました。さっそく帰ったら調べようと思います。まだ1度も訪れたことがないので、改めて関心を持ちました。ありがとうございました。（本学4年生）
- ◆私は出身が沖縄で、地震の経験があまりありません。なので熊本で地震が起きたときに地下水活用されていることを全く知りませんでした。県民にとって地下水がとても必要だということも知ることができました。昔と比べて都市化が進み自然が減り、そして水質の問題により地下水が少なくなってきたいて、それに対する県の取組も進められていることが分かりました。水に関する教育の取組も盛んだということも分かりました。お話を聞けてよかったです。（本学4年生）
- ◆普段から、取り組んでいること。意識付けをしておくことが重要だと思った。防災対策等は、すぐに必要なものではない（市の優先順位が低い？）ので、予算を多くするなど、日ごろよりやっておく必要がある？取り組み？（公務員）
- ◆あたりまえのように富士山の地下水の恵みを受けていますが、次世代の方々にも恵みを継続に受けられるよう大切に守っていかなければならないと思いました。（市嘱託職員）
- ◆水源を地下水に頼る都留市にとって、地下水を守る制度と取り組みを先進的に進める必要があると感じた。（市民活動支援センター）
- ◆大変貴重なお話をありがとうございました。手渡資料（スライド）をいただけると、ありがたいと思いました。災害時の給配水、浄水処理（濁度対策）は、どのように行なってい

たかなどがお聞きできなかったのが残念です。災害時に飲料水以外の生活用水に井戸水は使用できたのかも詳しく知りたかったことです。環境でなく水道ご担当の方でないと無理かも知れませんね。(一般)

◆熊本から来て下さったのに出席者が少なく残念です。都留市は水が豊かなので危機感ないのでは……。富士吉田などでは下水などと”ジゴク”といって地下にしみ込ませていると聞きますが湧水の水質には関係ないのでしょうか？(一般)

◆熊本県における地下水保全のとりくみがよくわかった。災害(地震)の際の対策の話がもう少し具体的にきければよかった。(一般)

◆妹と旅行：熊本に行く話を電話でして「明日にも申し込んでくるね」と言っていたら、テレビで熊本城の石垣がくずれているのが写っていて、びっくりし、旅行を中止にした事が、ありました。いつかは必ず行ってみたいと思っています。(一般)

◆市民公開講座なのに市民の参加が少なすぎ。せっかく講師の先生が遠方から来ていただいているのに……。内容等も市民の方がすすんで参加してみたくなるものの方が良い(今回の講義内容が悪い訳ではない)。(一般)

◆もう少し地震についての取り組みについて聞きたかったです。ライフラインが絶たれた中でどのように水を供給したのかを詳しく知りたかったです。また、再度災害が起こった際に地下水をどのように利用・保全していくのか等、地震と水がもう少し関連した話が聞きたかったです。(一般)

◆保全と防災対策の両方の話が聞けてよかった。時間があれば、防災(水)の対策の取り組んだこと具体例の話を知りたかった。(一般)

◆熊本について学べた。災害は人事でないと感じた。水の保全を本市ももっと積極的に進めるべきと思った(遅れている)。(一般)

(2) 暮らしのとなりにある水 ー東桂地区 用水路の夏と冬ー

毎年12月には、地域交流研究センター暮らしと仕事部門で実施した研究の中から、その成果の一部を公開講座として地域の皆さんに公表している。本年度は内山が2016(H28)年12月と2017(H29)年8月に東桂地区において、用水・河川水・湧水を一斉採水し水質分析した結果を講演した。公開講座は平成30年12月19日に実施し、参加者は12人であった。内容は、1)十日市場・夏狩湧水群についての基礎講座、2)東桂地区の地形的特徴と用水利用の背景、3)水質測定結果について発表した。結論として、都留市東桂地区の水環境は、冬季・夏季をととして環境基準の基準地内であったが、いずれの試料にも硝酸イオンを含み、それらは窒素同位体比の値から農地起源のものと推察される。また、リン酸イオンは1箇所の河川水を除いて河川水・湧水からは検出されなかったが、用水には含まれていることが明らかになった。

以下に、講演会後に書いていただいた参加者の感想を紹介する。

アンケート結果

- ◆都留市の水について、普段”安全なもの”と信じて使っているワケですが、安全性に裏付けがされて安心した。しかし、窒素同位体比のように安全であると確信したゆえに潜む、焦点が当たらなくなる危険の存在を知ることができて良かった。私は今東京都に住んでいるので科学的な調査・統計に対しては目を見張る必要があると思いました。(本学1年生)
- ◆暇だったので何気なく参加してみたが、身近な用水路に関する調査のデータしかも最新のものをみることで、たいへん興味深かった。質問ですが、もしこれから先 NO3-N の量が増加した場合、どのような影響があると考えられるでしょうか？また最後から2枚目のスライドの結果の差は肥料以外で主に何が原因なのでしょう？(本学1年生)
- ◆普段なにも考えずに使っている水について、理論的で調査を行った結果と、それが実生活に与える影響がわかりやすく学べて大変有意義だった。別の地域の水質に関しても、気になったら、今日の学びを生かして調べてみたい。(本学3年生)
- ◆今日講座に参加して、用水や川のゴミについて気になっていたことがわかって良かったです。調査では、問題なかったのが良かったのですがもう少し川にゴミがない状態になったらもっと良い用水、川になってくのではないかと思います。本日は、本当にありがとうございました。(本学4年生)
- ◆夏狩在住なので興味があり参加させていただきました。科学的に分析されたデータを見ることにより納得できました。水は人々の生活にとっても大切なものなので資源を大切にしたいと次世代に引き継ぎたいと思います。水菜を取りに行ったことがありますがあの水で育った野菜や米と思うと食べたくなくなります。生活用水が問題だと思います。浄化槽 etc. の普及を望みます。(市の方針、費用の問題があるので難しいと思いますが…) (本学職員)
- ◆都留は水がきれいですが、底にはゴミなどがあるので、もっともっと、きれいな水にして大事にしていきたいと思いました。(一般)
- ◆最近湧水が減っているとか聞いたりしたのですが、湧水がなくなるという事がありますか。(一般)
- ◆私たちは東桂地区に住んでおりますが、科学的な記号とかは良くわかりませんが、まずまず、きれいな水との事、少々安心しました。(一般)
- ◆湧水に表層水が影響を与えるとは驚いた。科学的根拠が説得力を増す要因だが、化学が難しかった。(一般)
- ◆知識がない人が受けてもわかりやすく良かった。まとめ部分で、傾向についてはわかったが、その結果により、どの程度水がきれいなのかなど、一般的な市町村や県と比較して欲しかった。(一般)
- ◆大変詳しく説明して頂き、勉強になりました。(一般)
- ◆研究者の皆様に敬意を！！しめします。水はとても大事なものです。用水路の歴史を初めて知りました。私は東京に住んでおりますので、水質に関しては関心はかなり気になっており、関心があり、現在も富士吉田の水を宅配していただき使用しております。東桂の水は水質が良いことは以前より知っていましたが、水に関しては、もっと関心をもちたいと思いました。富士吉田、河口湖等この方面の水道料金が安い訳が良くわかりました。水質が良いのでろ過する必要が少ないということですね。(一般)

(3) 今後の市民公開講座について

平成 30 年 6 月 9 日の講座アンケートを用いて、公開講座開催の曜日や時間について考察する。市民公開講座の認知については、チラシ 48%、ポスター 40%が圧倒的に多い。次いで職員からの紹介 20%、ホームページ 8%、案内メール 8%、広報つる 4%であった（複数回答可）。チラシとポスターについては事務局が学外の駅や学校、商業施設などに積極的に配布しているが、それが功を奏していると考えられる。より目に付きやすいデザインや配色を心がけたい。

開催日時について。6 月 9 日は土曜日の 13 時 30 分～15 時に開催した。曜日については、土曜日 56%、日曜日 36%、平日 36%（複数回答可）であった。時間帯については、良い 84%、悪い時間（17～18 時頃）が良い 12%、早い時間（10 時頃）が良い 4%であった。参加して下さった人については土曜日の午後早い時間が参加し易かったようである。一方で、土曜日は小学生の子供がいる家庭では野球などスポーツ教室の送迎があり、若い世代は参加したくてもできない、という意見も耳にしている。以前、12 月の平日 18 時過ぎでは仕事が終わらず参加できない、と熱心な方から後日の個別対応を頼まれたこともある。アンケートにも書かれていたように参加したくなるようなタイトルの工夫はもちろんのこと、学生や市民が広い世代にわたって参加し易い日程を探っていく必要があるようだ。

3. 平成 31 年度の活動予定

平成 31 年 4 月より組織が一新し、暮らしと仕事部門はフィールド・ミュージアム部門と共に自然共生研究部門を構成することになった。しかし、これまで暮らしと仕事部門で実施してきた「都留市を流れる水と暮らしと農のかかわりを探るプロジェクト」研究は、継続して実施する予定である。今後、新部門の中で微調整する可能性はあるが、現在の活動予定は、

(1) 都留市を流れる水と暮らしと農のかかわりを探るプロジェクト研究の実施

- 1-1. 東桂地区の水環境の観測・調査：永寿院および十日市場における地下水観測
- 1-2. 都留市周辺の農業の現状についてのヒアリング調査

(2) 市民公開講座

平成 31 年度は 3 回実施する予定である。1 回目は十日市場・夏狩湧水群の野外での見学、2 回目は自然科学棟天文台を利用したの星空観察、3 回目は研究成果の公表を予定している。1 回目と 2 回目は新しい試みとして、体験型の公開講座に取り組みたいと考えている。

(3) 都留市の水環境理解促進のための展示準備

十日市場・夏狩湧水群など都留市の特徴的な水環境を理解するための博物館スペースでの展示についての準備への取り組みを始めたいと考えている。

(文責：内山美恵子)

Ⅲ. インターフェイスとメディアの活動

Ⅲ－ 1. 第 14 回地域交流研究フォーラム

開催内容 第14回地域交流研究フォーラムは、都留文科大学元学長のドキュメンタリー映画、『かすかな光へ』上映会を開催

場 所：都留文科大学 2 号館 101 教室

日 時：平成 31 年 2 月 13 日（水） 18 時～20 時

開会の挨拶 竹下勝雄（地域交流研究センター長）

基 調 講 演 18 時 10 分～19 時 40 分 映画『かすかな光へ』上映

感想交流会 19 時 45 分～20 時

閉会の挨拶 杉本光司（本学特任教授・元地域交流研究センター長）

※なお、当日の様子については、当年報前半部分に報告掲載しています。

（文責：事務局）

Ⅲ－ 2. 各種講座の開催

（1）都留文科大学現職教職員教育講座

講座の趣旨

今年度も都留文科大学夏季集中講座として「現職教職員教育講座」開催しました。

そして今回のテーマを「中堅教諭等資質向上研修」とし、初めての試みとして、1 日を午前の部・午後の部に分け、2 講座を開講する形式で行い、両講座に多くの教育関係者の方が参加できるようにしました。

午前の部は、宮下聡先生（教職支援センター特任教授）の「生徒指導」－道徳性の涵養－、午後の部は、中川佳子先生の「特別支援教育」－教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用－を開講いたしました。

本講座は、山梨県教育センターによる「十年経験者研修」の選択講座にも指定されており、都留市内だけでなく県内各地の小中学校及び高等学校より、午前の部が 90 名、午後の部が 83 名の多くの先生方のご参加をいただきました。

日程と内容

日 時：平成 30 年 7 月 25 日（水）

会 場：都留文科大学（午前：1 号館 2 階 201 教室、午後：2 号館 1 階 101 教室）

主 催：都留文科大学地域交流研究センター

9時30分～ 10時	受 講 受 付
10時～12時	『生徒指導』－道徳性の涵養－ 講師：宮下 聡（都留文科大学 教職支援センター特任教授） 内容：全校種の教員を対象に、道徳性とは、その涵養の方法等について、 また、学習指導要領の目指すもの等について。
12時～13時	休 憩（昼 食）
13時～15時	『特別支援教育』－教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用－ 講師：中川 佳子（都留文科大学 学校教育学科教授） 内容：全校種の教員を対象に、特別な配慮の必要な児童生徒の特徴と、 ユニバーサルデザイン等の利用が、普通の児童生徒にもわかり やすい授業となることについて。

（２）都留文科大学子ども公開講座

都留市教育委員会の「放課後子ども教室」事業と本学の市民公開講座を連携させた「子ども公開講座」は平成25年度から本格的に開始された。対象となるのは、放課後子ども教室に参加している小学生で、夏休みや冬休みに、主に大学内で開催されている。

平成30年度は5つの講座を企画し、4講座を開催した。（サッカー教室については、例年に類を見ない猛暑であったため中止となった。）その開催状況は次の通りである。

平成30年度子ども公開講座参加人数一覧

※参加者数には、保護者・留学生を含む

日 程	講座タイトル	講 師 名	実施場所	参加者数
7月21日(土) 10時～11時30分	「木工工作教室」	青木 宏希 竹下 勝雄	美術棟	26名
7月21日(土) 13時～14時30分	「英語で遊ぼう！」	上原 明子	3号館ホール	25名
8月5日(土) 9時30分～11時	「新しい読書のかたち」	日向 良和 野中 潤	大学図書館	25名
8月10日(金) 9時～11時	「サッカー教室」	サッカー部 寺川 宏之	グラウンド	0名 ※猛暑のため中止
11月11日(土) 9時30分～12時	「森の木の実を集めよう！」	北垣 憲仁	大学周辺の森	18名

来年度も都留市教育委員会からの要望に応じて、様々な講座を開催する予定である。

（文責：事務局）

Ⅲ－ 3. 学部共通科目の開講

(1) 地域交流研究Ⅰ「地域」から見通せる範囲を拡げるために

都留文科大学の学生の出身地は日本全国に広がっている。平成30年度「大学概要」(p.18-p.19)によれば、入学者のうち山梨県出身者の占める割合は14.2%である。本学の授業で「地域」という言葉を発したときに、受講者が自分の出身地を連想することが不可避とすれば、地域という言葉の受け取り方にかなりの幅があることがわかる。

授業提供者の立場から考えてみよう。これは地域という言葉を用いるときの聞き手の受け取り方に自然条件、地理的条件、社会経済的条件、そして住民のバックグラウンドや相互作用の状況にかなりの差を想定する必要があるということだ。授業ではいろいろな地域の実例について紹介し、また受講生の出身地等について語ってもらう機会を設けるようにしている。

地域交流研究Ⅰのコンセプトのひとつは、地域社会に関する様々な場面で応用可能な基礎的なタームを学ぶということだ。都留文科大学学生の出身地の多様性をふまえたうえで、それぞれの出身地の状況との対照をうながしながら学習を進めるきっかけを提供することをねらいとしている。30年度の受講者は32名であった。

この学習は、場合によっては、学生の出身地以外の地域との比較のための共通言語ともなりうるものだ。聞くところによると、本学学生間での定番の話題のひとつは各地の方言や習慣などに関することであるという。即興の比較地域論というべきものであろうか。知っているようで知らない社会現象、類似の現象だと思っていたにもかかわらずしもそうとはいえない社会現象が日本ないし世界にはしばしばある。受講者それぞれが都留で見聞きする（おそらくは友人から耳にすることが少なくないだろう）事例を、普遍的な文脈で理解していくにはどのようにすればよいか、というのがこの授業で目指すところのひとつでもある。

たとえばこの授業でしばしば取り扱うタームのひとつに「コモンズ」がある。「コモンズ」という言葉には現代の地域と関わるときにしばしば出会う。熱心な学生ならなおさらだろう。時に日常的な場で発されるこの言葉から見通せる範囲を少しでも拡大したいと考えている。同時に、様々な場面でこの言葉は茫漠とした意味で扱われることも少なくない。しかしこの言葉は2009年のノーベル経済学賞受賞者 Elinor Ostrom の研究と密接な関わりがあることはいままでもない。ノーベル賞に関わる研究というと身構える受講者がいなくはない。しかし授業ではできるだけわかりやすく内容を解説することを通じて Ostrom の研究の意義についてもごく簡単ではあるがふれるようにした。大学の比較的早い時期に地域に関する授業で学ぶことと壮大な研究のつながりについて知ることは大切だろう。地域に関する学習から見通せる範囲がかなり広いことを知る一つの機会になりうるからである。

もう一つのコンセプトは、地域の多様性について俯瞰する目を養うことである。受講者の人数の関係で実施は簡単ではないのだが、既存の統計を用いて社会に関する目を養うことを平成30年度には試みた。このとき情報処理と地域に関するイシューに関する学習を進める機会とすることを目指した。社会に関する統計情報の活用は、今後も様々な分野で進んでいくだろう。個々の地域社会も例外ではないとみられる。地域交流研究もこの社会の動きに対応していくものでありたいと考えている。

さまざまな地域の事例に通じること、それを広い世界につなぐ基礎的なタームを得ること、

そして個々の地域の状況をそれを取りまく世界の中に統計を用いて位置づけること、半年間にわたってこれらの課題に取り組んできた。受講者が「地域」から見通せる範囲の拡大に、この授業が貢献したことを願うばかりである。

(文責：山口博史)

(2)「地域交流研究Ⅱ」－生きものの地図をつくる－

地域交流研究Ⅱでは、2011年より前期に「生きものの地図を作る」をテーマに、身近に見られる生きものの分布調査を実施している。定量的な調査をおこなうことで、季節の変化にともなう生きものの動態を把握し、ここで得られた情報を地域に公開する手法を学び、生きものの地図が地域交流に果たす役割を考察することが授業の目的である。

平成30年も受講生の人数調整を行ない、30名ほどでツバメ、イワツバメ、ハルゼミの調査を実施した。6班(1班は3～7名ほど)にわかれて調査をするが、例年、事前に用意した簡易図鑑を配布し、生きものに詳しくない学生にもデータが取れるように配慮している。生きものの地図を作るにあたっては、対象とした種の識別とその生きものがいつ、どこに、どのくらいいたのかを把握することが重要になる。種名が不確かで数量的な記録を伴わないデータは情報量が乏しい。そのため、調査対象の種を正確に識別し、個体数を記録することが重要である。

この授業では野外に出て調査をすることに重きを置いている。生きものに関する知識は、本やインターネットを介して、室内に居ながらにして触れることができるが、自分の足を使って得た情報はとても大事で、直接的な多くの学びはこのような経験のなかにあると考えるからである。受講した学生には、大学周辺の身近な自然に触れ、その意味を考える時間を持ってもらいたいと願っている。

班ごとに調査を行なった後はまとめをして、各班1枚のパネルを作製する。ここで作製したパネルは、都留文科大学前駅の待合室に展示し、その成果を広く公開することに努めている。調査、まとめ、パネル作製という一連の作業をこなすことで、調査対象を知り、調査結果から明らかになったことを理解し、その成果を公開することには、どのような意味があるのだろうか。自分たちが行なった調査から得られた情報を多くの人々に知ってもらうための工夫の仕方、その楽しさ、重要さに気づいていただけたら幸いである。

平成30年は天候によりカエル類の調査が実施できなかった。4年目となるカエル類の調査ができなかったことが悔やまれる。平成29年までの過去3年間に、アマガエルやトノサマガエルの分布に大きな変化はなかった。トノサマガエルは個体数の減少が著しい種であり、環境省と山梨県のレッドデータブックでは準絶滅危惧種となっている。これまでの調査により、水田環境や農業形態が現状のまま続くことがトノサマガエルの個体数を維持することに繋がると考えられた。引き続き調査を実施して、どのような条件の場所にトノサマガエルが多く生息するのかを明らかにする必要がある。

希少種や外来種の分布状況についても調査を行ない、その結果を学内はもとより都留市内にも広く公開していきたいと考えている。

(文責：西 教生)

(3) 地域交流研究 III 山梨に関する学習を通じて図書館に親しむ

筆者が山梨県に来て4年以上が過ぎた。この間、県内の各地を回り多くの文物にふれる機会があった。都留市内についても様々な手段でできるだけ各地を訪問するようにつとめてきた。各所を歩く中で様々な知識を得ることができた。山梨県内を歩いて得られるこれらの体験や知識を、半期というかなり短い期間で受講者が得られるように地域交流研究 III は設計されている。講師による座学のほか、県内各地をめぐる現地フィールドワークなどの機会を通じて山梨県の歴史・文化・地勢について知識を得ることができるからだ。30年度の受講者は80名であった。

授業のガイダンス等の機会に強調したのは、座学や現地フィールドワークは学習にあたってのひとつのきっかけであるということだった。もちろんそれを通じて学習を深めることにはなるのだが、そこから発展してひとつひとつの事例や県内の状況についての読書に親しみ、図書館に親しむことで、座学やフィールドワークの内容が身につくことを述べた。この授業を受講する中で特に関心を持ったテーマについては、各自が図書館で学習を深めるよう強く勧めた。

下に示す座学でのテーマ群や現地フィールドワークの行き先のいずれも、山梨や都留との関係が深いトピックを提供してくれる。山梨県出身学生と山梨県以外から都留文科大学に進学してきた学生が同時にこれらのテーマについて学習を深めることにも意義があるだろう。県内出身学生には改めて出身地について深く知るという機会になり、他県出身学生は県内出身学生の意見を聞きながらそれぞれの関心を深めることができるからである。

この授業で提供されるチャンスがない限りなかなか足を運ぶ機会のない場所もあるようだ。そのせいか、フィールドワークの時間配分の都合上、訪問地への滞在時間の長さも相まって、「離れがたい」ようすを見せる受講者がしばしばみられた。

座学では次のようなテーマが取り上げられた。

山梨県の概要と観光振興／山梨の歴史／山梨と富士山／郡内織物の新しい挑戦／地域資源の「試掘」／都留市の魅力／交通と観光について／山梨のワイン／山梨の宝飾品に関する内容／山梨の方言（「Can you speak 甲州弁？」）

また、今年度の現地フィールドワークは次の場所をめぐるものであった。準備の際に、近年大学生が授業以外で多忙化傾向にあることを痛感した。週末の予定を空けるのも容易ではないケースがなかにはあるようだ。

11/17(土)(博物館等) 山梨県立考古学博物館、山梨県立文学館、笛吹川フルーツ公園、山梨県立博物館、ジュエリーミュージアムなど

12/1(土)(道の駅等) 道の駅・甲斐大和、談合坂サービスエリア、道の駅・都留、道の駅・富士吉田、道の駅・勝山、道の駅・鳴沢など

(文責：山口博史)

(4)「地域交流研究Ⅳ」―地域を観察し記録する―

1. 授業の概要

「地域交流研究Ⅳ」は、身近な自然や人びとの暮らしにじかにふれ、その体験を記録し学びあうことをテーマとしている。本授業では、地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門の機関誌『フィールド・ノート』の実践と編集の過程を参考にしている。本年度で12年目となる半期の授業である。

本授業は、地域に出てじかに観察をしたり取材をしたりするため、事前に取材や観察の方法を相談するなどきめ細かな指導が必要となる。そのためシラバスにはあらかじめ少人数で開講する旨を記している。本年度の受講者は44名であった。また昨年度同様、留学生の受講も多かった。

学科別受講者数は次の通りである。

学校教育学科：6名

国文学科：17名

英文学科：6名

比較文化学科：6名

環境・コミュニティ創造専攻：3名

現代社会専攻：3名

地域社会学科：3名

授業の参考にした『フィールド・ノート』では、学生が自ら主体的に企画を立て地域の自然や文化をテーマとして記事を書く。この過程で学生は地域を歩きじかに自然や人びとの暮らしにふれる経験をする。こうした経験を言語化し、お互いに記事を読みあうことで他者の経験を共有する。『フィールド・ノート』では、冊子という形で地域の市民に届けることで学生と市民との交流が生まれ、大学での学びと自らの経験を重ね合わせながら学びを深めていく過程を大切にしている。

本授業でも、受講生が取材方法や観察方法などの事前準備をしたうえで、自ら地域にでかけて取材をし、記事を書く。また書いた記事を受講生で読みあい校正を繰り返していった。こうして最終的に冊子を成果物として印刷し、取材先など関係者に配布した。

今年度は受講生が多くしかも留学生の受講もあり半期の授業では丁寧な指導は難しかったが、他者との経験を記事を通して共有することで地域のさまざまな魅力を学べたなど本授業への肯定的な感想が多く寄せられた。

2. 授業の感想

授業を終えて次のような感想が寄せられた。(抜粋)

○これだけの受講者がいて一人もテーマがかぶらないことに驚いた。一番履修してよかったと思えた授業です。

○物事を理解するうえで言葉にするとということがいかに大きな役割を果たすかを確認できた。

- この授業から言葉にする作業を通して自ら考え学ぶことの大切さを学んだ。
- 身近なものをじかに観る大切さと、人に伝える難しさ・楽しさを学びました。

3. 来年度の授業について

来年度から「地域交流研究Ⅳ」の授業は、文学部3学科横断履修モデルの1科目として位置づけられることになる。そこで本授業では、「地域を観察し記録する」というこれまでの授業の目標は継続し、富士山周辺の動物を含む地域の身近な自然の理解をテーマとした構成とする予定である。

(文責：北垣憲仁)

Ⅳ. 地域貢献活動

Ⅳ－1. 山梨県南都留地域教育フォーラム

概 要

南都留地域教育フォーラムは「地域の子どもたちは、地域で育てる」という基本理念のもと、『連携活動』『交流活動』を軸に平成10年度の講演会及びパネルディスカッションから始まり、平成12年度から3分科会での実践活動報告による討論会となり、平成14年度は5分科会、平成15年度は6分科会、平成16年度は現在の7分科会で行われるようになった。

平成30年度の南都留地域教育フォーラムは、11月2日（金）に富士吉田市立下吉田中学校を会場にして行われた。南都留地域教育フォーラムは本年で20回を数える、この地域の教育関係者が一堂に集まり、報告される各事例について意見を述べあう会合である。教育委員会、校長会、教頭会のほか、各学校・幼稚園・保育園やPTA及びPTA連絡協議会、保育所保護者会、青年会議所、商工会議所、商工会など数多くの団体の参加があった。

参加者は200以上の団体から300名を超え、様々な立場からの意見交換によって今日的な課題への対応や解決を目指す機会となり、「全体会」と「分科会」で構成され、「全体会」では開会行事やアトラクション（地域の子どもたちの音楽活動の紹介など）を行った。「分科会」では『連携活動』『交流活動』をキーワードとする実践活動報告の発表を基に研究討議を行った。各分科会では2人の講演者が配置されており、都留文科大学の教員が各1名ずつ助言者を担当して行われた。

表 第 21 回南都留地域教育フォーラム分科会内容

第 1 部科会	提 案 者	助 言 者
幼稚園・保育所・小学校部会	富士吉田市立第四保育園	都留文科大学 学校教育学科 中川 佳子 教授
部会テーマ	園長 早川 和美	
子どもの心に、保護者の不安に 寄り添う支援をつなぐ	県立ふじざくら支援学校 地域支援部担当教諭 菊池 恵	
第 2・3 部科会	提 案 者	助 言 者
小学校・中学校・高等学校部会	山梨県総合教育センター 相談支援部	都留文科大学 教職支援センター 亀田 孝夫 特任教授
部会テーマ	都留こすもす教室 主幹 石原 孝子	
きれめのない支援をつくる	山梨県立ひばりが丘高等学校 校長 松野 正士	
第 4 部科会	提 案 者	助 言 者
小学校・中学校・高等児童 生徒部会	山梨県立富士北陵高等学校	都留文科大学 学校教育学科 西本 勝美 教授
部会テーマ	教諭 宮下 剛	
地域が子どもを育て、子どもたち が地域の未来を育てていく	特定非営利活動法人 かえる舎 代理理事 斎藤 和真	
第 5 部科会	提 案 者	助 言 者
行政・地域団体・学校部会	健康科学大学 看護学部 看護学科	健康科学大学 看護学部看護学科 武井 泰 准教授
部会テーマ	助教 黒田 梨絵	
つながりの中で育む	宝の山ふれあいの里・ネイチャー センター博物館学芸員 佐藤 洋	
第 6 部科会	提 案 者	助 言 者
特別支援教育部会	都留文科大学 地域交流研究センター	山梨県立大学 人間福祉学部 (都留文科大学非常勤講師) 里見 達也 准教授
部会テーマ	学校教育学科 講師 堤 英俊	
連携の中で子ども・保護者を 支える	NPO 法人 Mom 理事長 堀内 詠子	
第 7 部科会	提 案 者	助 言 者
P T A 部会	つる法律事務所 弁護士 中野 宏典	つる法律事務所 中野 宏典
部会テーマ		
連携して子どもを守る		

(文責：事務局)

IV－2．都留市放課後子ども教室事業

1. 「都留市放課後子ども教室」事業について

本事業は、文部科学省の「子どもの居場所づくり事業」（平成 16 年度）および「地域教育力再生プラン」（平成 17・18 年度）を発展的に引き継ぎ、都留市子ども協育連絡協議会を推進主体として、都留市教育委員会生涯学習課が事務局を担って実施している事業である。平成 30 年度は 6 つの小学校区（東桂、宝、谷村第二、旭、禾生第二、禾生第一）を中心に、

学校の体育館やグラウンド、図書室等に安全・安心に活動できる拠点を設け、地域の住民、大学生、社会教育関係者などを活動指導員として配置し、放課後や週末などにおける遊び、スポーツ、体験活動、学習支援などの活動を行っている。

2. 今年度の活動状況

地域交流研究センターでは、教育委員会からの依頼を受けて、活動指導員として協力してくれる学生を募集している。平成 27 年度までは、学生が希望する活動に申し込む方法だったが、この方法では申し込みの多い活動とまったくない活動に分かれてしまい調整が難しかった。

そこで、平成 28 年度からは、まずセンターが活動指導員として参加できる学生を募集し、教育委員会が募集の際に確認した特技や趣味から適する活動に参加をお願いする方法を取ることになった。

平成 30 年度は 24 名の学生が活動指導員として事業登録を行った。

また、138 の子ども教室事業の中で、83 の活動に参加をし、子どもたちをサポートした。

※なお、平成 30 年度は名簿登録者に加えて「教育フィールド研究Ⅰ」の学外活動で学校教育学科の 1 年生全員が放課後子ども教室の活動に参加している。

平成 30 年度放課後子ども教室学生参加状況一覧

「旭 子ども 教室」	開催日	活 動 内 容	活 動 場 所	学生
	5 月 30 日	プラバン工作	与縄営農指導センター	14
	6 月 13 日	ペットボトルけん玉を作ろう！	与縄営農指導センター	13
	6 月 27 日	ペットボトルけん玉を作ろう！	盛里コミュニティセンター	14
	7 月 4 日	じゃがいも掘って食べよう！	与縄地区	13
	7 月 21 日	英語で遊ぼう！	都留文科大学	8
	7 月 21 日	木工工作	都留文科大学	5
	8 月 2 日	読書の楽しさを知ろう！	都留文科大学	8
	8 月 20 日	風鈴作り	盛里コミュニティセンター	2
	9 月 19 日	禾一と合同活動（振替休日）	道の駅つる	1
	9 月 19 日	禾一と合同活動（振替休日）	道の駅つる	1
	9 月 30 日	音楽会	びゅあ富士	50
	10 月 3 日	つまみ細工に挑戦！	盛里コミュニティセンター	1
	10 月 10 日	パステルアートに挑戦！	盛里コミュニティセンター	13
	10 月 31 日	いも掘り＆遊び！	与縄営農指導センター	14
	11 月 14 日	マスク作り	与縄営農指導センター	13
	12 月 22 日	クリスマスリースを作ろう！	与縄営農指導センター	4
	1 月 23 日	バレンタインチョコ作り！	盛里コミュニティセンター	12
合計①				109

「三吉子ども体験教室」	開催日	活 動 内 容	活 動 場 所	学生
	6月6日	ペットボトルけん玉を作ろう！	図工室	13
	6月20日	自由遊び（水てっぽう等）	校庭、体育館	13
	7月11日	プラバン工作	図工室	13
	7月18日	じゃがいも掘り	校庭横の畑	13
	7月18日	じゃがいもをゆでて食べよう！	校庭	13
	7月21日	英語で遊ぼう！	都留文科大学	8
	7月21日	木工工作	都留文科大学	5
	8月2日	貯金箱作り！	図工室	6
	8月9日	つるっこ探検	体育館	16
	9月10日	山歩き！（虫や植物の観察）	都留カントリー等	1
	9月30日	楽器体験会&演奏会	ぴゅあ富士	50
	10月17日	地域に花を植えよう！	玉川グラウンド	3
	10月24日	グラウンドゴルフ	小学校校庭	17
	11月7日	さつまいも掘り	校庭横の畑	4
	11月28日	昔の遊び！	多目的ホール	2
	12月5日	番長（焼きいも）	校庭	13
	1月16日	バレンタインチョコ作り！	図工室	12
合計②				101

東桂活動報告	開催日	活 動 内 容	活 動 場 所	学生
	6月2日	開始式	東桂小体育館	20
	6月2日	ドッジボール対戦	東桂小体育館	9
	6月13日	ゲートボール	東桂小グラウンド	9
	7月11日	じゃがいもの収穫・自由遊び	畑（東桂地域）・東桂体育館	4
	10月10日	国際交流会	東桂小体育館	8
	11月14日	だいこんの収穫	畑（東桂地域）	3
	11月28日	友達と対戦しよう	東桂コミュニティーセンター	6
	12月19日	友達と対戦しよう	東桂コミュニティーセンター	5
合計③				64

宝活動報告	開催日	活 動 内 容	活 動 場 所	学生
	6月2日	開始式	多目的ホール	10
	6月2日	里いも等の植え付け	畑（宝地域）	7
	6月6日	ぶんぶんごまを走らせよう！	宝小体育館	3
	6月20日	スポンジボールを作ろう！	宝小体育館	1
	6月30日	じゃがいもの収穫、草取り	畑（宝地域）	7
	7月24日	オリジナルTシャツを作ろう！	多目的ホール	4
	8月9日	お祭り遊び	都留文科大学	2
	10月3日	ミサンガ作り	多目的ホール	1
	10月17日	宝の山の番長とたき火	宝小グラウンド	2
	10月27日	さつまいも、大根、里いも、収穫	畑（宝地域）	8
	12月12日	ビーズ小物作り	多目的ホール	2
	12月25日	粘土で貯金箱作り	多目的ホール	2
合計④				49

「禾一わくわくクラブ」	開催日	活 動 内 容	活 動 場 所	学生
	6月6日	外国の方と遊ぼう！	禾一小体育館	13
	6月20日	番長 ㊦(▽)㊦ 企画	禾一小体育館	13
	7月4日	かわいいせっけんを作ろう！	禾一小図工室	11
	7月11日	かわいいせっけんを作ろう！	禾一小図工室	11
	7月21日	木工工作をしよう！	都留文科大学	3
	7月21日	英語で遊ぼう！	都留文科大学	8
	8月2日	読書の楽しさを知ろう！	都留文大図書館	8
	10月10日	木の実を使って工作をしよう！	禾一小図工室	13
	10月17日	木の実を使って工作をしよう！	禾一小図工室	12
	12月12日	大学生と遊ぼう！	禾一小体育館	13
	12月15日	都留文大生と遊ぼう！	楽山公園等	7
	1月16日	昔の遊び ～俳句かるた大会！！	禾一特活室	13
合計⑤				125

①+②+③+④+⑤+⑥) 小計	574
重複分	34
学生参加合計数（名）	540

（文責：事務局）

Ⅳ－３．文大ボランティアひろば

１．文大ボランティアひろばとは

文大ボランティアひろば^１（通称：ぼらひろ）とは、地域交流研究センターと都留市社会福祉協議会との話し合いの中から生まれた「ボランティアをとおして交流できる場」のことである。平成 20 年度から 1 カ月に 1 回のペースで開かれており、本学のボランティアサークルを中心に、地域交流研究センターと社会福祉協議会の職員やボランティアの協力を呼びかけたい地域の方が参加して、緩やかな連絡協議会的な会合を行っている。

会合の内容は、前回の会合以降の各サークルからの活動報告、地域交流研究センターや社会福祉協議会からのボランティアニーズの情報提供、各団体からの協力呼びかけや新事業の提案、地域の方からの直接のボランティア募集の告知等が中心である。社会福祉協議会にとっては、とりわけ大学生対象のボランティアニーズを持ち込む「窓口」ができたことが大きく、各サークルにとっては、相互の活動に触れて刺激を受け合えることや、これらを通じて活動が活性化されることが大きい。ただし、ボランティアを行う際には次の点に気を付けなければならない。

- ①ボランティアはあくまで自発的なものでなければならず、大学やセンターが押し付けるものではない。
- ②それぞれのサークルの個性や独自性を最大限に尊重し、新たな負担をかけない。
- ③活動の蓄積のある既存サークルこそが新しい取り組みの中核である。
- ④平成 30 年度の文大ボランティアひろばは、8 月・9 月を除いて計 10 回開催した。

２．学生サークルについて

今年度のぼらひろには、以前から参加している「ボランティアサークル つくしの会」、「Σソサエティー」、「いこいのひろば支援サークル IKI」の 3 つの学生サークルのほか、社会福祉協議会事務局の方にお声がけいただき、「カンボジア支援サークル Plenty」や「つるっ子プロジェクト」など新たな団体の参加もあった。各サークルの主な活動は次の通りである。

つくしの会では、障がい者施設の訪問や献血推進活動などの福祉系のボランティアを中心に、地域に根ざした活動をしている。Σソサエティーでは、文大周辺の道路・ゴミ捨て場で朝のゴミ拾い活動を定期的に行っている。IKI は、いこいのひろば^１を支援するサークルで、障がいのある方や地域の方との交流を深める場を企画・運営している。いこいのひろばは、文大ボランティアひろばの中で、福祉施設の職員の方から「障害のある方が学生や市民と交流できる機会をつくってほしい」との声を受けて平成 22 年 10 月にできた交流の場である。カンボジア支援サークル Plenty はカンボジアの子どもたちに本を届けるために図書館建設を目的とした募金活動などを行なっている。つるっ子プロジェクトは東桂地区の耕雲院で月 1 回地域の居場所「つる食堂」の運営を行なっている。

1 文大ボランティアひろば及びいこいのひろばについては、地域交流研究年報第 7 号に詳しく掲載されている。

以下、「いこいのひろば支援サークル IKI」と「カンボジア支援サークル Plenty」の活動報告を掲載する。

《いこいのひろば支援サークル IKI》

私たちいこいのひろばでは、障がいの有無に関係なく、地域に住む人たち全員が充実して過ごせる地域づくりを目的として文化・スポーツ・レクリエーション等の活動を（概ね年10回程度）企画開催しています。

平成30年度の主な活動内容は、4月「乾燥フルーツを使った名札作り」、5月「巨大すごろく」、6月「バルーンアート」、7月「BBQ」、11月「旅行～ハイジの村」、12月「クリスマス」など楽しい時間を共有しています。

その後の企画に関しては、ここ数年のボランティア不足の課題に対し『緊急ボランティア募集プログラム』と銘打って、1月「話し合い」2月「ポスター作り」、平成31年4月「大学の新入生新歓に参加」、5月「巨大すごろくで交流しちゃう」と改善に向けて、みんなで向き合い力を合わせています。おかげさまで、6月大学で開いた地域交流研究センターの地域インクルーシブ教育分野との共同企画においては、大学新入生、都留興譲館高校生を含め50名程の参加人数となりました。これから先も、出逢いを大切にして活動していきますので、応援よろしくお願いします。

《カンボジア支援サークル Plenty》

私たちは都留文科大学のカンボジア支援サークル Plenty です。カンボジアの子どもたちに本を届けたいという理由で2012年に結成し、カンボジアの教育支援を行なっています。これまでは物資支援が主でしたが、平成30年度は初めてシェムリアップのコッチャン小学校に図書館を建設し、翌年にはポペル小学校にも図書館を建設しました。今年も図書館建設に向けて活動しております。目標達成には1月までに100万円を集めなくてはならないため、メンバー一同奮闘中です！！

普段は毎週水曜日と金曜日に大学にてミーティングを行なっています。また、都留市内の飲食店等に募金箱を設置させていただき、様々なイベントにて募金活動もさせていただいております。平成30年度は50万円を目標にクラウドファンディングも行ない、皆様のおかげで無事に成功いたしました。一年に一度スタディーツアーとして実際にカンボジアにも訪れています。カンボジアについてもっと多くの方々に知っていただけるよう精一杯がんばります！



ポペル小学校（2019年3月建設）



コッチャン小学校（2018年3月建設）

また、これらの学生サークルは個々の活動以外に、協働で取り組む活動も行っている。それが世界の子どもたちにワクチンを届けるためのペットボトルキャップの回収である。毎月大学内に設置されている回収ボックスから当番のサークルが回収を行い、ぼらひろ開催時に都留市社会福祉協議会の職員に渡している。

3. 都留市社会福祉協議会について

1でも述べたとおり、地域交流研究センターは都留市社会福祉協議会と共に、平成20年度からぼらひろを開催している。今回は、ぼらひろ設立時から尽力いただいている、都留市社会福祉協議会の森嶋美子氏に文大ボランティアひろばについて活動報告をいただいた。

「文大ボランティアひろば～誰でもどうぞ～」のこれまでと、そして、これから

平成20年6月から、「文大ボランティアひろば～誰でもどうぞ～」を始めてから今年度で11年目になりますが、この間、いろいろな変遷があり、振り返ってみると、多くの大学生や市民の方々の顔、また、様々な活動場面が思い出されます。

平成30年度は、都留文科大学地域交流研究センターと都留市社会福祉協議会が文大ボランティアひろばの更なる発展を目指し、協議を重ねてきました。

この協議の中では、参加者を増やすため大学生にとって有意義で魅力的な機会になるような運営面の工夫、また、連絡体制の再構築など、徐々に改善を図ってまいりました。

その結果、新たに大学生のボランティアグループが参加してくださるようになり、ネットワークが少しずつ広がってきました。

平成31年度は、都留文科大学地域交流研究センターと連携して、より多くの大学生や市民に参加していただけるよう創意工夫をして、文大ボランティアひろばをこれまで以上に発展させていきたいと考えています。

4. 地域交流研究センターにおけるボランティア募集

地域交流研究センターでは、主にサテライトを窓口としたボランティア募集も行っている。今年度は、災害ボランティアなどの依頼が計3件あり、学内の掲示板・学内サイト・ぼらひろを中心に参加したい学生を募集してきた。人の出入りが多い1号館に、ボランティア告知用の掲示板を設置したことで、ぼらひろに参加していない学生にも周知することができた。

5. 今後の課題

ぼらひろは、平成20年度から継続して開催されているが、毎回参加している団体のほかに、参加者がほとんどいないのが現状である。今年度は都留市社会福祉協議会事務局のお声がけもあり、新たな団体の参加もあったが、まだまだ参加者の増加にはつながっていない。また、参加団体の中でも年度が変わるたびに引継ぎが十分に行われず担当者が活動を把握していない、という問題がおこることもあり、参加団体の中でもぼらひろに対しての意識が薄い面も

ある。さらに、担当者の都合や部活の活動時間との兼ね合いでばらひろに参加できない団体もあり、開催日時も懸案事項となっている。

学内での認知度を高め、参加者を増やし、ボランティア活動の活発化につなげるために、今後の周知方法を検討していく必要がある。

(文責：事務局)

IV－4．地域交流研究センターサテライト

1．地域交流研究センターサテライトについて

平成 25 年度に都留市まちづくり交流センター内に設置された都留文科大学地域交流研究センターのサテライト（分室）である。サテライトでは地域の方々に大学をより身近に感じてもらふことや、大学と市民との交流促進を図ることを目的に活動している。

2．今年度の活動状況

大学と地域をつなぐ窓口として、ボランティアの募集や地域の講演会への講師派遣依頼、学生のイベント開催の支援などを行っている。平成 30 年度は、谷村地域協働のまちづくり推進会の要望を受けた、「路上ライ部」所属の学生と地域住民との交流会の開催や、「暮らしに役立つみんなの広場」開催など、多くのイベント開催を行った。特に、まちづくり交流センターで開催している「暮らしに役立つみんなの広場」では、本学の「茶道部」「邦楽部息吹」「かるたサークルあまつかぜ」「落語研究会」に所属している学生に大学生との交流としてイベントの開催を行なってもらった。また、今年度は新たな活動として、都留市中央公民館主催「はつらつ鶴寿大学」における学生ボランティアの募集を行ない、11 名の学生の参加があった。

今年度も引き続き、地域交流研究センターブログにおいて、地域のイベントに参加する学生たちの活動取材し掲載した。鶴寿大学学生ボランティアやみんなの広場、各部活動の地域での活動の様子は、このブログで紹介されている。また、都留市まちづくり市民活動支援センターと協力し、学生が地域で行うイベントや市内で行われるイベントの告知を行なった。このほかにも大学を市民に周知するための活動として、大学のイベントの案内やポスターをまちづくり交流センターに掲示し、フィールド・ノート、大学案内の配架を行った。

3．来年度の活動について

サテライトの存在をもっと多くの方に知ってもらい、広く活用してもらうために、ポスターやパンフレットを使用してサテライトの周知活動を行なう。また、学生・市民から寄せられる相談・依頼への柔軟な対応を目指し、学生と市民との交流の場を増やす活動を行なう。さらに、公民館及びまちづくり交流センターでの活動に活発に参加してもらうために、活動参加者を学内で募集する予定である。

(文責：事務局)

IV－5．文大名画座

文大名画座は、平成 18 年度から地域貢献活動の一環として実施しており、本学教員を広く市民の皆様に紹介するとともに、その教員がオススメする映画を本人の解説を踏まえて行う上映会のことである。開催状況は次の通りである。

第 1 回目

平成 30 年度の第 1 回目の文大名画座は、山梨県内の市川三郷町を舞台に撮影されたドキュメンタリー映画『ひいくんのあるく町』の上映を行った。上映会では都留文科大学の教員による解説とともに、この映画の青柳拓監督にお越しいただき、お話に加わっていただいた。

平成 30 年度第 1 回文大名画座 『ひいくんのあるく町』上映会

日 時：平成 31 年 1 月 9 日（水）18 時 30 分～20 時

参 加 者：35 名

場 所：自然科学棟 S1 教室

上映作品：『ひいくんのあるく町』

解説教員：COC 推進機構 山口博史准教授

コメント：学校教育学科 原まゆみ特任教授、学校教育学科 齋藤淑子特任教授

以下参加者のアンケート

- ・ ひいくんが街の中にとけこんで、地域の方と自然に交流している姿が心に残りました。街はずいぶん変わってしまっているけれど、いつも笑顔であるひいくんはいつもある安心感がある存在であるのかなと思って心があたたまりました。（10 代・女子学生）
- ・ 何とゆるやかに、とても自然に、人を、障害者を、老いを、病を受け止めることのできる町なのでしょう。ありのままに、自然体で生きているひいくんと、周りの人達が、うらやましく思いました。言葉は少なくとも伝わるものがあることを、改めて感じることができました。今、何かしゃべり始めたら、泣いてしまいそうで…黙っていたい…そう思うような映画でした。人のつながり、あったかいもの、なつかしくて尊いものを感じさせていただけました。ありがとうございました。（40 代・一般女性）



監督：青柳 拓氏

平成30年度文大名画座

**ひいくんの
あるく町**



僕の故郷の記憶には、いつも彼が歩いていた

シャッター街をほのかに明るく照らす珠玉の47分！
かつての町は今でも温かく、いつまでも優しい。

【日 時】 平成31年1月9日（水）18：30～20：00
（18：00～受付）

【場 所】 都留文科大学 自然科学棟S1教室

【参加費】 無料

【定 員】 190名



申込方法①大学ホームページの[専門ページ](#)（イベント情報）で申込む。
②下記の申込先にメールで申込む。
※メールでお申込みの際は、お名前、市町村、連絡先をご記入下さい。
（都留文科大学の学生は学科、学年をお願いします。）

申込・問合せ先

都留文科大学 地域交流研究センター ☎0554（43）4341 （内線606・243）	地域交流研究センターサテライト （まちづくり交流センター内） ☎0554（43）1451
---	--

メールアドレス ckouryu@tsuru.ac.jp

 都留文科大学 地域交流研究センター

第2回目

平成30年度の第2回目の文大名画座は、1964年に封切られたフランス映画『シェルブールの雨傘』を上映した。

本作は第17回カンヌ国際映画祭のグランプリほか、映画賞を多数受賞しており、フランスの港町を舞台にその町の人間模様が描かれた作品である。上映会前説では、都留文科大学の教員によるフランスの地理や当時の時代背景などの解説が行われ、参加者の方にもわかりやすい回になったと思われる。

平成30年度第2回文大名画座『シェルブールの雨傘』上映会

日 時：平成31年1月23日（水）18時30分～21時

参 加 者：26名

場 所：自然科学棟S1教室

上映作品：『シェルブールの雨傘』

解説教員：COC推進機構 山口博史准教授

以下参加者のアンケート

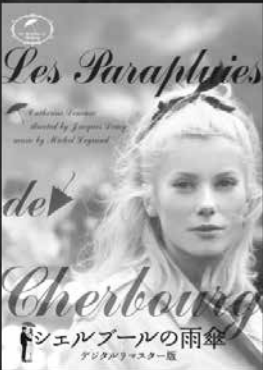
・フランス映画でそれもミュージカルなので大変興味深かった。あまり多くはミュージカル映画を見たことがないが、他のミュージカル作品と違うと思ったのは全編が歌で構成されて

いるところだ。(20代女性)

・上映前に先生から時代背景とキーワードの説明があったので、内容がすんなりと入り映画を十分楽しめました。ありがとうございました。ストーリーもですが人物の衣装が美しくたんのうしました。さすがフランスですね。ラブストーリーっていいですね。(60代女性)

・作品の中身製作時の時代背景、etcが聴けたので映画を身近に感じました。始めに解説があったお陰で見るべき所を見逃さなくて済みました。名画・名曲もありがとうございました。日本もこのままでは怖い、戦争により人生を変えられたり人の心まで変えてしまう。平和な日本を望みます。(60代女性)

平成 30 年度第 2 回文大名画



【日 時】平成 31 年 1 月 23 日 (水)
18:30~21:00 (18:00~受付)

【場 所】都留文科大学 自然科学棟 S1 教室

【参加費】無料
申込方法①大学ホームページの専用ページ(イベント情報)で申込む。
②下記の申込先にメールで申込む。
※メールでお申込みの際は、お名前、市町村、連絡先をご記入ください。
(都留文科大学の学生は学科、学年もお願いします。)

都留文科大学 地域交流研究センター
☎0554-43-4341
内線(606・243)

地域交流研究センターサテライト
(まちづくり交流センター内)
☎0554-43-1451

メールアドレス **ckouryu@tsuru.ac.jp**

 都留文科大学

(文責：事務局)

Ⅳ－6．「学級づくりの向上をめざす実践講座」の活動報告

平成30年度は6回の予定であったが、台風の影響で7月の講座が中止となり、計5回にわたって開催された。

- ・第1回 4月28日（土）金勝武鑑（元公立中学校校長）
渡辺幸之助（河口湖北中学校校長）
いじめに挑む学級づくり～金勝先生とみんなで考えよう！ いじめを乗り越えられる
子どもの集団を育てる（座談会）～
- ・第2回 5月26日（土）渡辺克吉（小立小学校教諭）
クラスみんなが主人公！ 子どもの願いと要求を実現する学級
- ・第3回 6月23日（土）浅川早苗（旭小学校校長）
Q－Uを生かした学級づくりを進める考え方と具体的な方法
- ・第4回 7月28日（土）長田絵美（双葉中学校教諭）
台風の影響により中止
- ・第5回 9月29日（土）小山博史（小菅小学校教頭）
授業、日記、学級通信でつなぐみんなの心
- ・第6回 11月24日（土）深沢羊子（若草中学校教諭）
本音もぶつけ合える話し合い活動で中学生を一步大人にする

平成30年度は、計118名の参加者があった。毎回、現職の教員のみならず、本学の学生も参加している。学生にとっては、大学の講義だけでは分からない学級づくりの具体的な方法や事例を学べるだけでなく、現職の先生方とも身近に交流できるということが魅力となっている。

平成31年度は、7回にわたって開催される予定である。

- ・第1回 4月27日（土）金勝武鑑（元公立中学校校長）
座談会：いじめに挑む学級づくり2～金勝先生とみんなで考えよう！ いじめを乗り越える子どもの集団を育てるには～
- ・第2回 5月25日（土）長田絵美（双葉中学校教諭）
保護者を学級のサポーターに！信頼関係が広がる学級づくり
- ・第3回 6月22日（土）渡辺幸之助（河口湖北中校長）
圧倒的な量のコミュニケーションで思春期に信頼の根を張る
- ・第4回 7月27日（土）丸山 優（甲府東小学校教諭）
とことんやりたい！ 学級担任のエネルギーで子どもを巻き込む
- ・第5回 9月28日（土）島袋あゆみ（吉田高校主任実習助手）
高校の放送部で主体性・気づく力を育て、本気にさせる指導
- ・第6回 10月26日（土）武井明子（わかば支援学校教諭）
特別支援学校高等部で人間関係形成能力を教科と学級活動を中心に育てる試み
- ・第7回 11月23日（土）堀内 弥（忍野中学校教諭）
生徒集団のもつ文化性を変えることで秩序を生み出す挑戦

（文責：鶴田清司）

V. 地域交流研究教育プロジェクト

V-1. 田んぼクラブ～稲作体験実習の取り組み～

プロジェクトメンバー 西本 勝美 (代表・本学学校教育学科)
別宮有紀子 (本学学校教育学科)

1. 本活動の経過と活動概要について

「田んぼクラブ」は、都留市職員の勧誘・仲介を受けて、都留市農業委員会および山梨県富士・東部農務事務所の協力のもとに2005年4月に始まった活動で、本学近くの水田(約6畝・大学から徒歩5分)で学生と教員の有志が稲作に取り組む、今年度(2018年度)で14年目となる活動である。ただし、後に記すように、本活動は今年度をもって終了することとなった。活動を振り返ると、当初の2005年度～2007年度の3年間は農務事務所のはからいで山梨県の「ふるさと水と土基金」の助成を受け、続く2008年度・2009年度の2年間は「環境教育GP」の一環に位置付けられ、活動が大いに発展した。そして、2010年度からは、本学の「環境ESDプログラム」との関連(実習系への位置づけ)もあり、本学地域交流研究センターの「地域交流研究教育プロジェクト」に申請し採択されてきた。今年度は、プロジェクトとしての第3期3年目(通算9年目)であった。

2008年度以降は農業委員会から自立し、「基本的にはすべての作業を自分たちでやる」ことを目標として、それまで市役所の農業リーダーや農業委員会に一任していた種籾の消毒・催芽といったところから、播種、田植え準備、水入れ、田植え、除草、稲刈り、はぎ掛けはもちろん、夏期休業中の水見も当番制でやり切ってきた(代掻き等のトラクター作業はJAに委託、脱穀・精米は毎年工夫して市民等の協力を得てきた)。無農薬・有機質肥料の使用による有機栽培米への挑戦も一つの目的であった。なお、2010年度からは「学生主体」の運営が目指され、ほとんどの作業を学生のリーダーシップで進めることができるようになっていた。

2. 今年度(2018年度)の活動について

この数年、学生組織が弱体化し、活動の継続が危ぶまれる事態となっていた。そこで、昨年度(2017年度)は教員のほうでもテコ入れをすべく、私自身はもとより、北垣憲仁先生、別宮有紀子先生、西教生先生にも声かけをしていただき、ある程度の人数の新規参加者を得て活動を開始することができた。しかしながら、六代目となる学生代表が途中から思うように動けなくなり、彼にとっても不本意な活動となってしまった。今年度(2018年度)は、この六代目の学生代表が「挽回を期す」という趣意を重ねての活動開始となった。プロジェクト代表教員の私としては、彼が頑張りが過ぎてまた動けなくなったりしないように気遣いながら声かけをし、見守る姿勢を意識した。また、年度初めには若干の新規参加者も得ることができ、播種、田植え、1回目の草取りまでは比較的順調に進めることができた。

本活動の大きな特色としては、2011 年度から「水苗代」と「疎植一本植え」に取り組んできたことが挙げられる。これは 2011 年度当初に、一代目の学生代表を中心とする学生メンバーからの発案がきっかけとなり、学生数名と私とで長野県の農家に研修に行き、ノウハウを教わったうえでの取り組みであった。

「水苗代」は、田の一角に周囲を堀で囲った床をつくり、直に種籾をまいて苗を育てる育苗法で、農村でもほとんど見られなくなった古い方法であるが、これに取り組むことで米づくりの全行程をクリアし、発芽や苗の生長のようす、稲の旺盛な生命力を実感することができる。2013 年度からは、この水苗代の改良型として、木枠とブルーシートで浅いプールを作り、その中に播種した育苗箱を並べる方法（プール苗代）を試みてきた。これは育苗中の雑草対策と、水管理の合理化のための改良であったが、水の不足や温度の過上昇が一気に致命的なダメージとなること、プール内の水質が悪くなることなど、思いがけない困難も生じ、土（自然）と切り離れた環境で苗を育てる難しさを痛感することにもなった（土とつながっていれば、さまざまな変化が緩衝される）。苗づくりには毎年、苦勞が絶えないのであるが、今年度はこれまでの教訓（とくに昨年度の教訓）を活かして工夫を凝らし、比較的順調に苗を育てることができた。

田植えは、上述のように 2011 年度から、田植機の場合よりも大きく育てた苗を、縦・横 30cm 間隔（尺植え）で 1 本だけ植える「疎植一本植え」という方法でおこなってきた。稲は 1 本だけ植えても根元から分けつして 20～30 本に増える。通常の植え方（3～5 本くらいを一個所に植える）ではわかりにくい、「一本植え」では 1 本が 20 本に、また「一粒が千粒」になると言われている稲の生態をはっきりとつかむことができる（一本植えを始めた当初、実際に収穫時に数えて「一粒が千粒以上」になることを実際に確かめた）。これらの取り組みは、米づくりの工夫を知るという点でも、稲という作物を深く知るという点でも大きな成果を挙げてきた。

さて今年度の活動であるが、上述のように 1 回目の草取りまでは比較的順調であったが、夏休み前頃から学生たちの求心力が急速に低下し、多くの作業を学生代表一人か、ごく少数のメンバーでやらざるをえないような状況になった。予期された事態ではあったが、私自身は来年度以降の活動継続は困難との思いを強めていた。10 月の稲刈りもメンバーの日程調整ができず、結局、学生代表が面識のある市民有志の方に機械刈りをやっていただくことになり、脱穀も遅すぎる時期に J A に依頼することになった。この状況でも責任感を持って活動を支えた学生代表には敬意を表するが、客観的にはもはや本活動の体裁をなさない状況であった。

精米も済んだ 12 月初旬、私から学生代表に「来年度以降の活動継続は難しいと見ているが、どうするか学生メンバーで話し合って結論を聞かせてほしい」と伝えたところ、最後までメンバーの自覚のあった数名と相談した結果として、「今年度で活動を終了する」との報告があった。学生代表自身にも、昨年度の不本意さのある程度は挽回できたという達成感も感じられたため、彼らの下した結論を受けとめることにした。

振り返ってみると、2010 年前後の時期に本学では「農業ブーム」があり、いくつもの農業系サークルが活動し、本活動もおおいに盛り上がっていたが、その後、急速にブームが去り、本活動も低調となっていた。この背景には、学生たちの気質の変化や、余裕のなさの増大といった条件もあるように思う。ただ、14 年の長きにわたって本活動を継続してきた意義と

成果、この間に活動に参加した数多くの学生たちが得たものの大きさを考えると、「悔いはない」というのが率直な気持ちである。本活動の14年間で有形無形に支えていただいた方々に、心からのお礼を申し上げたい。

なお、2012年度から本学の「環境ESDプログラム」の「実習系」活動の履修（2年次〜）が開始され、「田んぼクラブ」は同プログラムの「ナチュラルライフコース」の選択履修対象に位置づけられているが、今年度は該当者がいなかった。

（文責：西本勝美）

V-2. 食育つる推進プラン

【2018年度活動報告】

「食育つる推進市民会議実施計画案」Ⅰ～Ⅴに基づき、以下の活動を実施した。

題材名：「都留市食生活改善推進員が教える大学生を対象とした減塩料理教室」

日 時：平成30年12月5日（水）

場 所：調理実習室

対 象：大学生

参加人数：36名（学生24名、市役所1名、都留市食生活改善推進員10名、教員1名）

内 容：昨年度から始まった、都留市の食生活改善推進員の方々による減塩を意識した料理教室が今年度も開催された。実習前に、食生活改善推進員の方々より減塩指導の講義があり、食塩過多による健康への影響や、若者世代の食生活の問題点を挙げ改善しなければいけない理由やアドバイスをいただいた。実習時は、班ごとに食生活改善推進員がつく形で、調理技能を教えてもらいながら、三食丼（キンピラ、オクラ、秋鮭）、サツマイモのレーズン煮、ほうれん草のクリームスープ、水かけ菜のおひたし、みかんの計5品目を調理した。今回の体験を通し、減塩意識について、事前事後調査を行った所、減塩の大切さや生活改善、病気予防について意識が高まったことが明らかとなった。

題材名：「おやさいたくさんたべようね」栄養教室

日 時：平成30年12月12日（水）

場 所：さくら保育園（都留市田野倉）

対 象：園児30名（3～5歳）

学生参加：15名

内 容：野菜の大切さや栄養について、パネルシアターや絵本、歌で楽しみながら説明した。また、さまざまな野菜の切り口を用意し、園児がそれぞれのタオルハンカチに自由にスタンプを押してオリジナルタオルハンカチを作成した。野菜の形や大きさ、切り口の面白さなどから、野菜に興味関心を抱いてもらえるように努めた。

題材名：「つる食堂」への参加

日 時：平成 30 年

7 月 18 日、8 月 22 日、9 月 19 日、10 月 17 日、11 月 21 日、12 月 19 日

平成 31 年

1 月 16 日、2 月 20 日、3 月 20 日

場 所：耕雲院（都留市夏狩 1884）

対 象：乳幼児、小学生・保護者、地域の方々

学生参加：8～25 名

内 容：学生や地域ボランティアの方々と共に、都留市近郊に住む子ども達へ、カレーライスなど食事提供と学習支援、レクあそび、ロボットプログラミング等を通じて居場所作りを行った。

<平成 31 年度の予定>

毎年、学生が中心となって、より良い活動にしようと切磋琢磨しながら積極的に取り組んでいる。今年度も、引き続き上記の活動に取り組むと共に、都留市内の小学生を対象とした「のびのび興譲館クッキング塾」において、食育や調理の基礎、栄養等について、調理実習を通じて伝える活動に取り組む予定である。

（文責：平和香子）

V-3. 谷二(やに)ラボ

テーマ：谷二(やに)ラボ ～小学校教員志望学生の科学実験に関する実力向上と小学生の科学への興味喚起の機会としての放課後実験教室～

申請代表者：学校教育学科 准教授 山森美穂

協力者：学校教育学科 准教授 平和香子

【目 的】

①小学校教員をめざす学生が指導的立場で小学生とともに実験をする経験を積むこと、②学生が実験内容の選定から安全な実験教室の運営までを行う経験を積むこと、③学生の自然科学の素養を高めること、④理科実験教室への参加が子どもの理科への興味を高める効果を検討することである。

【概 要】

谷村第二小学校で放課後に小学生を対象とした理科実験教室（通称「谷二ラボ」）を平成 23 年度からはじめた（27 年度は山森の学外研究のため休止）。実験教室の内容選定や準備、当日の進行は学生が中心になって行い、上記目的①～③の達成を目指す。参加した小学生を対象に、アンケートやインタビューを行い、理科実験教室への継続的参加が子どもの理科へ

の興味を高める効果を検討する（目的④）。同時に、指導的立場で参加した学生に対する効果も検討する。

【平成 30 年度の報告】

谷村第二小学校で、放課後に小学生を対象とした理科実験教室を行った。

第 1 回：5 月 23 日 「試験管の中に雪のような結晶をふらせよう」

参加者：小学生 51 名、大学生 5 名。

第 2 回：2 月 20 日 『くりかえし使えるエコカイロ』『たたくと冷える冷却パック』のしくみ」

参加者：小学生 46 名、大学生 6 名。

第 1 回は、塩化アンモニウムが温度による溶解度の差が極めて大きい物質であることを利用した実験である。試験管の中の水に、常温では溶け残り、70～80℃のお湯には溶ける量の塩化アンモニウムを溶かす。その試験管をゴム栓でふたをし、溶けるまで湯せんであたためる。溶けたあとは湯せんから出してしばらく放置すると、溶けきれなくなった塩化アンモニウムの結晶が試験管の中にできてくるのだが、その結晶の形や、結晶が試験管の中でゆっくりと下降するさまが、まるで雪のようである。児童たちは結晶ができてくる様子を興味深く観察していた。

第 2 回でとりあげたエコカイロは、酢酸ナトリウム三水和物の過飽和水溶液に衝撃が加わると結晶化が起これると同時に発熱することを、瞬間冷却パックは、尿素が水にとけるときの吸熱量が多いことを、それぞれ利用したものである。酢酸ナトリウムと尿素はどちらも負の溶解熱を示し、エコカイロと瞬間冷却パックの作動時に起きている反応は、いわば裏返しに関係にある。この回では、準備実験よりも当日大幅に時間がかかり、時間内にエコカイロを持ち帰れる状態にすることができなかった。学校のご厚意で、冷めるまで学校に置かせていただき、担任の先生から子どもたちに渡してもらうこととなった。

【平成 31 年度に向けて】

平成 30 年度は 2 学期に学校側と当方の都合が合わせることができず、2 回しか実施できなかった。できれば、学期に一度は行えるようにしたい。

また、低学年と高学年が一緒に行くことは、意義がある一方で、反応や理解度が異なることにより、進行に少なからず影響する場面も見られた。内容によっては、低学年と高学年で日程をわけ、それぞれの年齢層により即した展開とすることも検討したい。

（文責：山森美穂）

VI. COC 推進機構

平成 30 年度「あかでみあ・ふじやま」について

「グローバル」ということが昨今しばしば論じられる。とはいえ、(実際は多くの事柄がそうなのだが) 言うは易く行なうは難しという言葉は、グローバルな活動を実現することにもよくあてはまる。ここで、特定の地域に関する知識を深めることやそれに関わる活動、そして外国を含めた広い世界に目を向けることを両立することがグローバルな活動につながっていくと考えられる。そこにむけて、さらなる工夫の余地が方々にあるということであろうか。どこにその余地があるのかは、グローバルな活動に取り組んでみてはじめて見えてくることもあるようだ。

特定の地域についての関心の深化と広い世界への視線を持つための企画として「あかでみあ・ふじやま」(Academia Fujiyama Program、AFP)を構想した。AFP は文大生と国内大学に在籍する留学生を対象としたものである。そのねらいは、都留文科大学の学生に国際交流の機会を提供しながら国内大学にすでに在籍している留学生とともに富士山および山梨県内の文物を題材にしてこの地域に関する知見を深めることである。企画は日本語と英語で実施した。実際に行なったのは次のような内容であった。参加者は文大生 6 名、他大学の学生 12 名であった(プログラムへの部分的参加学生を含む)。とはいえ AFP を実施する 8 月末は文大生が出身地にいる時期でもあり、今後さらに文大学生が参加しやすくなるよう工夫していきたい。

第 1 日 (8 月 25 日)

到着・登録

第 2 日 (8 月 26 日)

オリエンテーション (於・都留文科大学)

富士登山の歴史に関するセミナー (於・都留文科大学)

博物館でのセミナー (於・笛吹市)

富士吉田火祭フィールドワーク (於・富士吉田市)

第 3 日 (8 月 27 日)

富士山の成因と湧水に関するフィールドワーク (於・都留市内) (学校教育学科・内山教授による)

織物体験会 (於・都留文科大学)

第 4 日 (8 月 28 日)

フィールドワーク (富士吉田市内、北口浅間神社、富士山五合目、西湖・河口湖など)

希望者のみ ムササビ観察 (於・都留市内)

第 5 日 (8 月 29 日)

出発準備

プログラムは概して好評であった(末尾に文大からの参加者の声を抜粋引用する)。初めて会うという学生が大半である中で、自主的なアイスブレイキング活動が行なわれるなど、参

加学生の自主性がよく発揮された。他大からの参加者はもちろんのこと、文大生も足もとの都留市のことについてほとんど聞いたことがない話も少なくなかったようだ。一例として、文大学生の中に溶岩を初めて認識したという声があったことをあげておこう。溶岩の見分け方をもとにフィールドワーク中に発見した溶岩に水がしみこむかどうかの実験を即席で行なう学生もいた。

今回、昨年に引き続き学校教育学科の内山教授に富士山と湧水に関する講義を依頼した。参加者にはたいへん好評で、巡検の大きな教育効果を改めて実感することになった。その他、暑い時期であったため、参加者の体調管理には留意した。特段の問題なく企画を終えることができた。

「グローバル」な活動としての AFP により、文大生・他大学生に一定程度の学習機会提供を行なうことができた。(なかなかの隘路ではあるが) 今後も着実に AFP の改善を進めたいものと思う。

【文大生参加者からのコメント】

・留学生のみなさんは、日本に対しての興味関心が本当に高く、わたし自身も含め、今回の AFP でいろいろなことを学んだと思います。わたしはたった 2 日間でしたが、留学生はみんなとてもいい人たちですぐに仲良くなることができまし、別れることに寂しさを感じました。AFP に参加する都留文科大学からの日本人学生も増えるといいなと感じました。

・私は、あかでみあプログラムに参加したことで、今まで知らなかった富士山の地形や歴史、成り立ち、富士山周辺に生きていた日本人の文化について知ることができました。私は英文学科なので、富士山についての知識が少ないので不安でしたが、先生方が丁寧に説明してくれましたので、とてもわかりやすく学べました。

私がこのプログラムの参加を決めた理由は、友達を作りたいということと、ボランティア要項を見てボランティアをしてみたかったことと、後期の英文専門の授業「Introducing Mt.Fuji」の予習になるかもしれないと思ったからです。

他大学から参加してくれた留学生や学生たちは、私が想像していたよりもずっとフレンドリーで、博識で、親切で、友達もたくさんできました。遠くからわざわざ来ているだけあってみんな勉強熱心で頭も良く、自分にとって刺激のある 3 日間になりました。あいにく 3 日間しか参加できず、全ての日に参加できなかったことをとても残念に思っています。また、都留文科大学に来ている留学生もこのようなプログラムに参加すれば他大学の友達もできるし、田舎の都留に来た意味を見いだせるので良いのではないかと思います。

(文責：山口博史)

付) 2018 (H30) 年度 地域交流研究センター担当教員

竹下 勝雄	学校教育学科教授	地域交流研究センター長 発達援助部門 (地域美術教育担当)
北垣 憲仁	地域交流研究センター教授	地域交流研究センター副センター長 フィールド・ミュージアム部門担当
杉本 光司	情報センター特任教授	発達援助部門 (地域情報教育担当)
小河智佳子	情報センター特任准教授	発達援助部門 (地域情報教育担当)
鳥原 正敏	学校教育学科教授	発達援助部門 (地域美術教育担当)
青木 宏希	学校教育学科特任教授	発達援助部門 (地域美術教育担当)
堤 英俊	学校教育学科講師	発達援助部門 (地域インクルーシブ教育担当)
原 まゆみ	学校教育学科特任教授	発達援助部門 (地域インクルーシブ教育担当)
齊藤 淑子	学校教育学科特任教授	発達援助部門 (地域インクルーシブ教育担当)
内山美恵子	学校教育学科教授	暮らしと仕事部門担当
山口 博史	COC 推進機構准教授	COC 推進機構担当

2018 (H30) 年度 地域交流研究センター運営委員会委員

古川 裕佳	広報委員長	上原 明子	学校教育学科
田口 麻奈	国文学科	Hywel Evans	英文学科
両角 政彦	地域社会学科	水野 光朗	比較文化学科
別宮有紀子	環境 ESD プログラム 運営委員会	小宮 文彦	経営企画課長
前島 礼子	国際教育学科	平井 勝典	市民代表 (都留市まちづくり市民活動支援センター長)
木下 慎	国際教育学科		

2019年9月19日 発行

編集者 都留文科大学地域交流研究センター

発行者 都留文科大学
〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1
電話 0554-43-4341(代)

印刷所 有限会社 印刷エトリ
〒402-0052 山梨県都留市中央 2-7-24
電話 0554-43-3451
